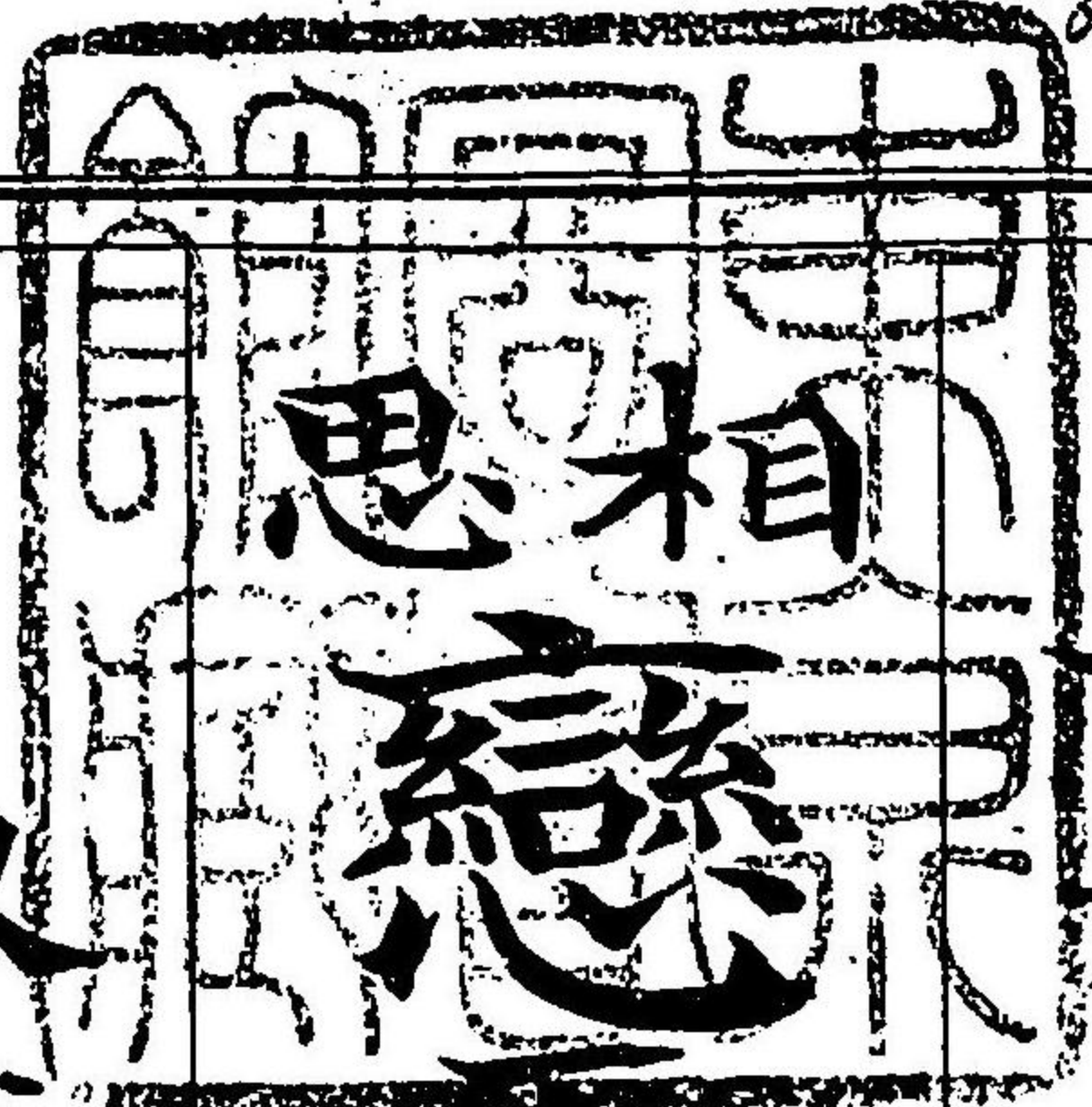


No. 947/XXIV.

68-2

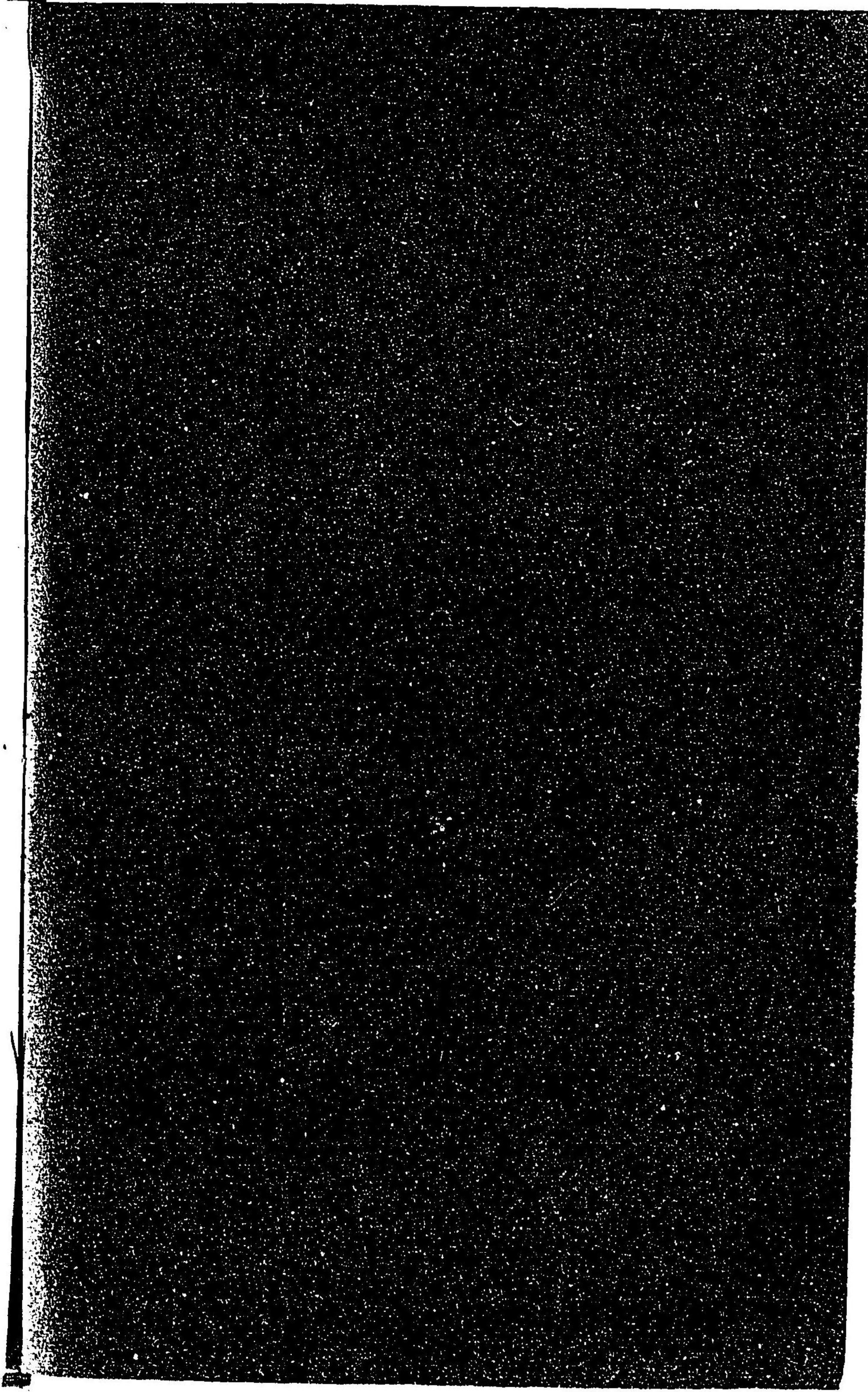
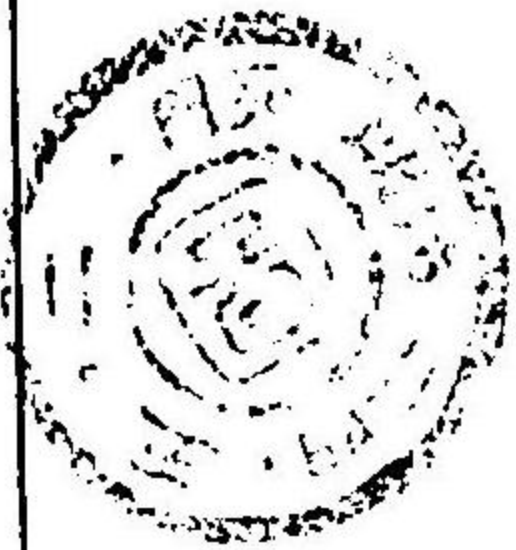


無識庵主人著

戀愛之現象

前篇

東京 金港堂藏版



自序

言葉しがらむ唐糸の解くにどかれぬ下心の現象は吾人の生活上に廣大の關係を有し詩人の眼孔外哲學者の尺度外に運轉するものにして高尙且つ絶妙なるものなり、されば之を正當に説明せんには心理、倫理、社會、統計上の學則に由らざる可らず、然り而して本書議論の精髓は余が意識より發生したるものなれども又アリストートル、ダーウ井ン、スベンサー、ベイン、テローロル、ルボツク、サレー等の意見より來れる所少なしとせず、唯恐る余輩が

君により思ひならひぬ世の中の

人は之れをや戀と云ふらん

の自歴ある日、單に學理と想像に拘泥せず哲人の能力を以

二
て玄の又玄なる妙理を觀察し衆妙の湧き出づる美観を描き出したらんには讀者に對して幾分の満足を與ふるを得べしと信すれども身自ら淡冷なる「マーブル、ハート」にして戀を對する感覺更らになきが故に全篇を徹して一の活氣なく恰も規律に違ふを怖れて線と彩色とを程々に集めたる繪畫の如く抑揚高下なき音樂を奏するが如く敢て情意の現われざる死人を彫刻せる如く又砂上に建築せる樓閣の如き觀あるは蓋し是非なきことにこそ

明治二十三年四月下旬

著者識す

文科大學教授 ドヒロクソトフルヒオ 元良勇次郎氏の愛情論

元良先生の哲學心理學上に關して餘程精密の智識を有せらるゝことは世評のある所なれば今更爰に喋々せむ、余幸ひも朝夕先生に接して屢々名論卓説を拜聽するの光榮を得るものなり、先頃思ふ所ありて此篇を草し以て先生に精細の論評を乞ふの意なりしが時偶々其愛兒病篤く多忙に又多忙を重ねるの折柄なれば之れを請求する能はず甚た遺憾に思ひしが先生の許諾を受け前きに論述せられたる「愛情論」を卷首に附し其代りと爲しぬ

著者再識

愛情ハ人間兩性ノ間ニ發スルノ感情ニテ小ハ家族大ハ一社會ノ結合カトナル、小説ニ演劇ニ詩歌ニ雜話ニ夢ニ現ハレテ各自ノ精神世界ニ在リテ大權ヲ以テ人ヲ支配スルモノナリ、英雄豪傑モ學者モ平民モ男子モ婦人モ四方ノ敵ニハ打勝ツト雖モ精神ノ情欲ヲ制スルヲ得ズ爲メニ生涯ノ方向ヲ誤リ汚名ヲ傳フルノ人少ナカラズ即チクレオバトラノ爲メニ身ヲ失ヒタルアントニーノ如シ、之ニ反シテ愛ハ感動ノ基礎トナリ動機トナル、ベアトリスノダンテニ於ケルミセス、テイラーノジョン、スチユワード、ミルニ於ケルマダム、テ、ボーコントニ於ケルシヤロト、デ、ロアンチツツノパスカルニ於ケル等以テ證スルニ足ル、愛情ハ人ヲ死ニ導クコトアリ又人ニ生活ヲ與フルコトアリ、是レ精神的

ノ一大不可思議現象ト云フベシ

愛情ノ發達ハ肉體ノ發達ト緻密ナル關係ヲ有スルモノニテ人十五六歳ニ達スルトキハ肉體機關ノ組織大ニ變化ヲ生ジ未タ經驗セザル感情ヲ發ス、此時肉體ニ於テモ精神ニ於テモ新シキ生活ニ遷リ所謂幼心ヲ離レテ己レヲ知ルノ階級ニ達ス己ヲ知ルハ他ヲ知ルノ別名ニシテ之ヲ他言スレバ彼ト我トヲ區別スルコトヲ知ル、彼我ノ區別アリテコソ始メテ愛情モ存シ得ルモノニシテ愛情ハ乃チ彼我相引合ノ性ナリ、人或ハ曰フ利己主義ハ乃チ己レヲ愛スルニ非ズヤト、吾人ハ斷言セントス是レ愛情ニ非ザルナリト、愛情ノ存スルトキハ必ズ自己ノ外ニ愛スルモノナカル可カラズ、其ノ物必ズ活動物ニシテ我等ノ慾望ニ満足ヲ與フル

物ナラサル可カラズ、美花ヲ見テ人之ヲ愛ス蓋シ美花ノ人心ニ與フル快樂大ナレバナリ、然レトモ是レ愛情ト云フ可カラズ、人ハ家畜ヲ愛ス、是レ愛情ト云フ可シ、美花ハ人ノ美術的ノ性ヲ樂マシメ牛馬ハ人ノ勞ヲ助ク是レ其ノ快樂ヲ生スル所以ナリ、然レトモ我等同感ノ朋友ト相共ニ語リテ樂シム其ノ快ハ美花美家美服ノ及テ所ニ非ズ、美術的ノ性質ト同感ノ朋友ト相合スルモノハ他ナシ美麗ナル淑女即チ是レナリ、之ニ加フルニ生理的ノ元素アリテ大關係ヲ有スルト雖トモ精神的ヨリ見ルトキハ雷ニ之ヲ色情ト云フノミニテ尙ホ分解シ能ハサル一種ノ感覺ニ過キズ、色情ト愛情ト密ニ關係スルト雖トモ一ハ下等動物ト同一ナル肉慾ニシテ他ノ一ハ之ニ精神的ノ快樂ヲ加ヘ高尚ナル精神

現象トナル、一説アリ曰ク愛情ハ元肉慾ヨリ生スルモノナリト蓋シ下等動物未開人等ニ於テ社會ノ根本家族ヨリ始マレバナリ、之ニ反シテブレット一ハソクラテスヲシテ言ハシメテ曰ク愛情ハ元人間ノ靈魂未ダ人體ニ入ラザルノ前天ニ在リテ其ノ榮光ヲ見タルガ故ニ再ヒ又其ノ榮光ヲ見ント欲スルノ慾望ニヨリ美麗ナルモノヲ見レバ精神ニ感情ヲ發ス之レ愛情ナリト、然レバソクラテスノ愛情ハ天ヨリ下リタルモノナリ進化論者ノ愛情ハ肉情ヨリ進化シタルモノナリ、此二説互ニ相反スルガ如クナレトモ決シテ然ラズ、ソクラテスハ想像的ニ之ヲ論ジ進化論者ハ發達ノ順序ヲ論ジタルノミ、其ノ根元ハ天ニ在レ或ハ肉情ニ在レ我等ノ愛情ハ一種ノ精神現象ニシテ其ノ性質ヲ探究セン

トスルニハ先ツ此情ヲシテ精神中ニ發セシムル物ノ性質ヲ知ラサルヲ得ズ、今之ヲ左ニ記サン

第一、美人ノ愛情——是レ即チ最モ普通ノ愛情ニシテ其ノ内種々ノ元素ヲ含メリト雖トモ肉情、美術的、感情的、同情相親シムノ情ハ其ノ重モナルモノナリ、美術的トハ即チ美麗ヲ好ムノ情ニシテ實利ノ思想ト區別セザル可カラズ、隨ツテ愛情ハ實利ヨリ發スルモノニ非ラズ一層高尚ナルモノナリ、然レバ婦人ニシテ一家政ヲ取ルノ人宜シク爰ニ注意セサル可カラズ、妻ノ能ク夫ヲ喜バシムル豈管ニ御無理御尤モ主義ニシテ可ナランヤ、家ヲ飾リ身ヲ飾リ夫ヲシテ我が家ヲバラダイスナリト思ハシムルハ誰レノ責任ナルツ、若シ其ノ家ニ不満足アラシム乎夫ハ必ズ他ニ快樂ヲ求メザル

ヲ得ズ、是レ人情ノ然ラシムル所ニシテ理ノ制シ能ハザル所ナリ、讀者宜シク注意アレカシ、而シテ同情相親ムニハ又二三ノ状態ナカル可カラズ、一言ニ之ヲ云ヘバ自己ヨリ柔弱下等ナルモノ、同感ハ人心ニ快樂ヲ與フルコト甚ダ少ナシ、自己ノ尊敬スル人ノ同感ハ精神上大ナル快樂ヲ與フルナリ、故ニ人ノ妻タルモノハ其ノ夫ノ下婢ノ如ク自己ノ意見ヲ主張スルコトナク唯御機嫌如何ト始終天氣模様ヲ見テ其ノ豫防ヲスルモ如何デ其ノ夫ニ眞誠ノ快樂ヲ與フルヲ得ンヤ、之ニ反シテ教育アル婦人ニシテ夫ト相共ニ世事ヲ談シ互ニ相助クルノ能力アルモノナレバ苦樂ヲ共ニシテ快樂ヲ與フルコト甚ダ大ナリ、二三ノ例ヲ以テ其ノ極端ニ達シタル人ヲ示サン、

ダンテアーリギリハイタリヤノ有名ナル詩人ニシテ其ノ名ヲ後世ニ傳ヘシ人ナリ、千二百七十二年ビトリス、ボリチナリナル美人ニ遇ヒ天人ニ遇ヒタル感情ヲ發セリ、其ノ後婦人ハ他ニ嫁シ若年ニシテ死セリダンテノビトリスヲ見シコト一二度ニ過キズト雖トモ其ノ美麗ナル容姿ハダンテノ精神ニ存シ氏ノ美妙的想像ヲ助ケシコト實ニ大ナリト云フベシ、畫工ガ人體ヲ畫カントスルトキ其ノ摸範ノ爲メ美人ヲ雇ヒ之ヲ前ニ立タシメテ畫クコトアリ、實ニビトリスハダンテノ精神中ニアリテ氏ノ爲メニ摸範トナリタルナリ、

又ジョン、ステワード、ミルハ父ゼームス、ミルノ教育ヲ受ケ學問上大ナル進歩ヲセシニモ拘ラス世ノ風波ニ遇ヒシ

コトナク二十五歳ノ時ミセス、テイラーナル婦人ニ遇ヘリ、其ノ時ミセス、テイラーハ二十三歳ナリキ、ミルハ始メテ天ノ默示ニ遇ヒシガ如クニ思ヒ此時ヨリ互ヒニ朋友トナリテ親密ニ交際セシコト殆ント二十年、テイラーノ死後ミセス、テイラーハミセス、ミルトナリ後七年ヲ過テ死セリ、ミルハ夫人ノ死ヲ憂ヒ墓ノ側ニ小屋ヲ造テ其ノ所ニヘレン、テイラー(ミセス、テイラーノ女)ト共ニ居リ書籍ヲ以テ家ニ充タシ植物學ノ研究ヲ爲シテ氣ヲ慰メ後再ビ社會學心理學等ニ熱心ニナレリト云フ、氏ノ生涯ミセス、テイラーノ爲メ感動ヲ受ケシコト少ナカラズ、氏ノ「自由ノ理」ハ同婦人ノ死後直チニ出版セシモノニテ同婦人ニ「デザケート」セシモノナリ、尙ホ一例ヲ舉ケン、

佛國ノオウゴスト、コントハ社會學ノ元祖ニシテ高名ナル人ナリ、氏ハ千七百九十八年ニ生ル、實理哲學ヲ組織セン爲メ多年ノ功勞ヲ費シ終ニ社會學ヲ一科ノ學術トシテ世ニ公ニセリ、氏ハ二十七歳ニシテ書籍ヲ商フ婦人ト婚シ不幸ニシテ再ビ相別ル、ニ至リシガ其ノ後四十七歳ノトキマダム、デ、ポーナル婦人ニ遇ヒ交際スルコト一年ニシテ婦人死セリ、此一年ハ氏ノ生涯ニ於テ大革命ノ期ニシテ氏ノ思想ト感情大ニ變ジタリ、氏ハ學者ヨリ變ジテ高僧トナリ一種ノ宗教ヲ造リ婦人ハ三形ニシテ人間ノ保護者トナルコトヲ説ケリ、人幼ニシテ慈母ノ保護ヲ受ケ婚シテ妻ノ保護ヲ受ケ老テハ女ノ保護ヲ受ク故ニ女子ヲ崇拜スルハ人倫ニ適フコトナリトノ説ヲ以テ一ノ教理ヲ立テ一時人心ノ

感動ヲ惹キ起セリ、是ニ由テ之ヲ觀レバ美ニシテ且ツ意アル婦人ノ詩人哲人ヲ感化スルノ力大ナリト云フベシ、

第二、勇氣ト愛情——婦人ノ美麗ハ男子ノ勇氣ニ等シ、予曾テ米國ニ在リシトキ一奇談ヲ聞ケリ、一日夜會アリ男女共ニ會シ其ノ中ニ後來婚姻スル望ミアルモノ共ニ集マレリ、然ルニ其婦人泣キ居ルヲ側ニ在リシ友人見テ其ノ故ヲ問ヘリ、婦人答ヘテ曰ク我が戀人一杯ノ酒ヲ一度ニ飲ム能ハズ其ノ勇氣ナキヲ悲ムト、之ヲ聞テ彼男ハ多量ノ酒ヲ一度ニ飲メリ、爰ニ於テ彼ノ婦人ハ後慥カニ其ノ男ノ妻トナルコトヲ決心セリト、又彼ノ高名ナルナイヤガラノ瀧ノ瀬ニ會テ人ノ無事ニ渡リシコトナキ所アリ、二三年前ノ事ナリシ一壯年種々工夫ヲ廻ラシ小舟ヲ造リ其ノ瀬ヲ渡ラント

試ミタリシガ幸ニシテ成功シ無事渡ルコトヲ得タリ、其ノ時兩岸ニ立ツ數千ノ人々ハ大聲ヲ發シ其人ノ成功ヲ贊賞セリ、其ノ後此人ノ妻トナラントスル候補者幾人ナルヲ知ラズト、婦女子ノ心底推シテ知ルベシ、シエクスビヤハ此性質ヲ知レリ、彼ノヲセロガデスデモナト婚セシトキ人々大ニ驚キヲセロハ黒キ「ムア」デスデモナハ議官ノ女ニシテ美人ナレバ元ヨリ愛情ヲ以テ婚姻スルノ理ナシト思ヒヲセロハ議官ノ女ヲ奪ヒタリトノ嫌疑ニヨリ朝廷ニ引カレタリ其ノ時ヲセロ云ヘリ、我レ強壓ニヨリテ女ヲ奪ヒシニ非ズ我カ經驗セシコトヲ語リテ其ノ心ヲ奪ヒタリト、其ノ話ニ曰クデスデモナノ父ハ我ヲ愛シ屢々我ヲシテ物語リセシメタリ我レ生涯ノ經驗ヲ物語レリ洪水ニ遇ヒシコト戰

場ニアリテ漸ク生命ヲ救ヒシコト敵ニ捕ラレ奴隸ニ賣ラレシヲ奴隸ヨリ我身ヲ贖ヒシコト夫レヨリ種々ノ話シニ至リ食人々種ノコト眉ノ下ニ頭ノアル怪物ノ話シ等ヲ爲セルトキデスデモナハ側ニアリテ之ヲ聞クコトヲ好メリ終ニ愛情ヲ發シテ婚姻スルニ至レリ、デュークハ之ヲ聞キテ謂ヘリ我女モ亦斯ノ如キ話シヲ聞キタレバ愛情ヲ發スルナラント、然レバデスデモナノ美人モ「ムア」ノ勇氣ニハ其心ヲ奪ハレシナリトハ世ノ人情ヲ表ハシタルモノナリ、

第三、哲人ト愛情——昔日ギリシヤニ於テ行ハレシ一種ノ愛情アリ、ギリシヤハ論辯學ノ盛ニ行ハレシ國ナレバ學者ハ自己ノ論辯ヲ習練スルヲ以テ最上ノ快樂トセリ、隨テ智カシキ少年ヲ相手ニシテ自己ノ論辯ヲ試ムルノ風大ニ行

ハレタリ、其ノ時顔ノ美麗ナルト智ノ鋭敏ナルトニヨリテ
愛情ヲ發シ肉情ヲ交ヘザル熱情ヲ以テ互ニ交際セリ、是レ
即チブレトノ論スル愛情ニシテ始メハ顔ノ美麗ナルヲ
見テ愛情ヲ發スト雖トモ概括ニヨリテ一個人ヨリ衆人ニ
及ボシ終ニ理想ノ愛情ヲ發スルニ至ル、

第四、婚姻ト愛情——男女既ニ婚スレバ愛情其ノ目的ヲ達
シタリト云ハザルヲ得ズ、然リト雖モ又一方ヨリ見ルトキ
ハ結婚ハ人ヲシテ始メテ完全ナル者ト爲シ新シキ生活ヲ
始ムルノ時ナリ、結婚ハ生涯ノ最大ナル出來事ナリ、其ノ前
ノ愛情ト其ノ後ノ愛情甚ダ異ナレリ、何トナレバ前ニハ唯
飾リタル一部ノ性質ヲ互ニ知ルノミニシテ全体ノ性質ヲ
知ルコト甚タ難ク加之前ニハ金錢ノ關係全クナケレバナ

リ、之ニ反シテ結婚後一家ヲ保ツニ至テハ互ニ其ノ全體ヲ
知ル各人皆長所アリ短所アリ、故ニ或ハ夫レガ爲メ互ヒノ
關係ヲ破ルコト少ナカラズ殊ニ日本ノ如ク婚姻ノ後ニ於
テ始メテ相親シム如キ風俗アル國ニ於テハ眞誠ノ愛情ヲ
發スル唯偶然ニ任スノミ、

結論——愛情ノ性質斯ノ如シ、美術的ノ性アリ勇氣的ノ性
アリ同感ノ性アリ、是等ハ皆男女ノ間ニ發スルモノナリト
雖トモ亦ソクアラヌ云ヘル如ク愛情ハ之レニ限ルモノ
ニ非ズ同性ノ間ニモ發スルナリ、グロート氏ハブレトノ
愛情ニ關シテ云ヘルコトアリ、曰ク始メテ賞歎ノ情發スル
ヤ同伴ノ法ニヨリ體面ノ美麗ハ精神ノ美麗ヲ示シ尙ホ概
括シテ實ニ一個人ノ美麗ノミナラズ何物ニ限ラズ美麗ナ

ルモノヲ賞メ終ニ我等ノ精神ハ抽象的ノ美麗ヲ覺ユルニ
 至ル是レ理想的ノ美麗ニシテ諸テ美麗ノ模範トナルナリ
 ト、然レバ我等ノ愛情ハ種々元素ヲ有スト雖トモ美術的ノ
 思想ハ愛情ノ上ニ最モ大關係ヲ有ス兩性ノ區別ナク彼ノ
 美麗ヲ供フルモノハ我等見テ愛セザルヲ得ズ、唯反對ノ元
 素アリテ美麗ヲ蓋フコトアリト雖トモ理想ノ美麗滅スル
 コトナキナリ、

(右六合雜誌第百號より轉載す)

相思戀愛之現象前篇目錄

緒言	一
第一章 戀愛の定義範圍及目的	一
第二章 戀愛の要素及調和	六
第三章 戀愛と餘他愛情の比論	二十
第四章 戀愛の種類及表出	四十二
第五章 戀愛と天然及社會の境遇	七十一
第六章 戀愛と美貌及美質	九十九
第七章 戀愛の進化と婚姻及離縁	百三十四
第八章 戀愛と社會進步の關係	百六十七
第九章 戀愛と苦樂及外物の聯感	百九十
第十章 戀愛と倫理及誠實	二百二十
以上	二百四十一

相思戀愛の現象前篇

無識庵主人著述

緒論

吾人々類の結局の目的は最大数の最大幸福を得るにあ
る。然れども現在の儘よししては之を得られざるが故に外界
の境遇を變化し、天然力を支配して社會の爲めに利用せざ
る可からず之れを以て勢ひ万有、生物、人類及び社會に對す
る正當確實の觀念なくんば決して社會全體の文明を來し
る最大の幸福を得る能はざるなり、凡そ天地間の事物よしして
其の種類性質境遇の如何を問はず悉く一定不變の法則に
支配せられざるものなし、されば社會の文明も偶然と發出

するものに非ずして必ずや自然の法則に從ひ利潤の爲めに我等が勞働するより來るものならざる可からず、故に吾人の万有、生物、人類及び社會學上の明了正確なる觀念あるを要す、蓋し吾人の慾望の理性の力を借り其の道を得て始めて満足せられ文明の正當なる思想に導かれたる勞働の結果に外ならざればなり、

万有學上の
觀念

第一、万有學上の觀念——社會眞正の進歩とい吾人の幸福を増加するを云ふよて若し吾人の幸福は平均なかりせば(自家の勢力の多少に比例したる公平無私の快樂)飽迄も眞正の進歩即ち文明の名を冠するは適せざるものなり、然り而して過去、現在、未來よ於て絶へず吾人の生活上に必要なもの恐らくと物質的材料は若くものなかるべし我等は物質的の惑星に住居し、形

而下の法則に依て圍繞せられ、而して其の間に存在する物を衣食して生活するものなり、此故に外界物質の性質及び互の關係を辨知するの要言を俟たずして、知るべし、彼の日月星辰の回轉より地球の形狀、年歴其の他引力、風雨、瓦斯等に關し誤謬の觀念は眞實の觀念よりも永く流行したりしなり、然れども人間は自然を研究するの學生なれば理性の力終は愈々万有の秘密を發かんとするに至れり、之に由て恐怖、迷信、驚愕、畏懼の念漸々薄らぐに至りしは大に喜ぶべき事にしてケプラー、ラプラス、ハーシエル、ガリレオ、ニウトン、コペルニカス、ハットトン、ライエル、クイパー、ルイス、アガシオ、エンマヌエル、ガント等の諸學者の勞にありとす、
夫れ道徳に對するの邪曲の多く天然物に對するの無智

と並行し、道德と對するの正確は天然物と對するの有智と並進するものなり、外界の事物と對して狹隘の見識あるものなりせば固より其の行爲の高大にして運動の活潑なるを願ふ可からず、思ふに同一の人類にして樂世主義ヘミスマとなり或は厭世主義ヘミスマとなるものあるは此自然の事物、外界の境遇に對する觀念の差異に由るものならん、

第二、生物學上の觀念——社會の文明に利潤を與ふるもの、畜養無機物質のみならず有機活物亦大に其の要あり、吾人の食物の礦物的、植物的、動物的に漸々進歩したるものにして、今日の植物動物の類最も食物の材料となれり、最初の人々は飢渴の感を満足せん爲め種様の物質を味ひ以て通例の食物と醫藥、毒物の三者と區分し漸々に地方の境遇

に従ひ礦物、植物、動物を得之を料理するの技術を發達し又寒暖を防禦するの衣服住居を得んとして勞働し以て今日の社會國家を爲すに至りたるものなれば生物一般に對するの觀念を有すると甚た緊要なり、世上衣食住の三者に對し偏見僻説を抱いて衛生上幾何の損害を蒙りしや計る可からず、蓋し無智者の刺激を受けて受動的に漂泊し有智者は精神の作用を以て自發的に活動するものなり、世に無智のものなかりせば佛教の所謂眞如、基督教の所謂天國を得べしと雖も之れ唯想像なるのみ而して此生物に對する觀念ハブローフ、ラマーク、エラスマス、ダーウ井ン、チャールレス、ダーウ井ン、スペンサー、ハックスレー等の諸學者と依りて漸々明了となりしは社會の爲め大に喜ばざるを得ず、

吾人日常の生活上並びに經濟上に莫大の關係を有し社會の改良進歩に與て力あるものは無機有機の二者なる事明かなりと雖も人間に對する最強の仇敵の人間なるを知らば人類學上の觀念を有すること又必要なり、アレキサンダー、ポープ曾て云へり人間の常に研究するものは人間なりと然れども近世に至るまで人間を研究する方法甚た當を得ざりしなり、即ち觀察經驗に由らず獨斷内省に由れり、實に身體の機關より精神の能力に對するの觀念は狹隘にして淺薄の見識のみなりし、抑も人間罪惡の跡絶へず快樂富貴の不均あるは要するに人類に對する觀念の薄きが故なりと信ず、

人類學上の
觀念

第三、人類學上の觀念——人類學上の觀念といふ今日の所

謂古代の土器、石器、曲玉、穴居等を調査し歴史前の風俗習慣を知ることのみを指すにわらず、彼れも亦一部分なりと雖も此處に云ふ意の人類一般行爲の過去、現在、未來に對するの觀念なり、故に其の身體と共に精神を知り過去に於ける行爲を知ると共に、現在、未來の行爲を知覺し推測せざるべからず、夫れ有智の人は無機有機の物質を利用して己れの快樂を供するのみならず同等の人類を利用して己れの幸福を増すを得、故に吾人の研究は實に人類に重きを置くべきなり、

抑も我等の身體に關係を有するもの二あり、一は衣食住にして生命を保存するもの一は男女の關係にして種族を繼續する再生の作用之れなり、我等も此二者なかりせば生

八
命を保存するに由なく子孫繁殖の便なく從て精神の活動
あることなし、故に人間の何たるを知らんと欲せば身體の
構造機關を辨じ智識、道德、美妙の能力を知り之れと共に男
女の情慾、色情の差別、其の蔓延、戀愛の情緒、其の結果、身體的
及び社會的の變更より婚姻一般の慣例、男女社會上の不同、
衣服、義務及び權利の同不同等を知らざる可からず、若し夫
れ心身相關の理法と男女の關係を知らざれば未だ人類に
對する正當の觀念あるものと稱す可からず、夫れ我等人類
の集合所は愛情の勢力、畏懼の勢力、智識の勢力、美妙の勢
力等ありて互の間は關係を有するものなれば之を知るこ
と實に緊要なりと云ふべし、今日社會の文野ハ夫等勢力に
對する觀念の多少は由て差異あるなり、此人類に對するの

觀念ハジョン、ルボック、タイロル、ドレーパー、ホーエル、ローマ
ニス、リポー、グント、スペンサー、ベイン、ダーウソン等の諸
學者の勞に由り漸次明了に至らんとするの兆あるは賀す
べし、

社會學上の
觀念

第四、社會學上の觀念——既に無機有機の性質を知り人
類の何たるを辨せば夫等三者の集成して組織せられたる
社會は對して正確なる觀念を有すること又要あり、社會上
の事實として先づ家族の起原發達、政治の制度、法律、經濟の
變化、宗教の機關、儀式の制度等より繪畫、彫刻、言語、技術一般
文學等に至るまで辨知するを要す、即ち心身を有する人類
の集合して活動する社會の運動に對して正確なる觀念な
かるべからず、

十
余輩が常に社會全體の罪惡苦痛の境を脱して愉快快樂の現存する幸福を得るは自然の現象が人間の利益と調和して進歩するより來り、進歩は智力より得たる所の行爲より、行爲は万有と人間の關係に對する見識即ち意見より起り、意見は境遇を熟知する智識より來り、智識は現存する智識を社會に普及する教育より來るものなるを信ず、夫れ然り而して戀愛の現象は家族及び社會の結合力となるものにして吾人の心身に快樂を與へ、或は苦痛を與ふること何ものか此情に若くものあらん、世上此情を對する正當の觀念を有せずして心身の損害を蒙り、耻辱を受け、道徳に背犯し、立身を妨げ、家庭を不潔にし、妻子を苦め、社會の風俗を亂し、國家の元氣を衰へしむるもの幾人ぞや、又世上之に對

する正當の觀念を得て愉快の空氣に滿され、琴瑟の如く相和合し、社會の風俗を潔からしめ、國家の元氣を隆んならしむるもの幾人ぞや、戀愛の現象の時代に由り場所に由り境遇より又人に由て差異あり、しうも萬人之を有す、人生上偉大の勢力あるもの何者か之に及ぶべけん、

人間の戀愛の情力あるは天性なり

人に必ず戀愛の情なかる可からず、戀愛の情なきは人よあらざるなり、唯其人の性質と境遇の如何に由りて之を味ふの期に多少の早晚あるのみ、貴賤、賢愚、老若、男女皆な此情を有せざるなし、夫れ誠實にして天真なる戀愛は幸福の給與者なり、冷淡なる社交上の太陽なり、愉快快樂の種子、世界活動の基本なり、嘗に現世に光澤を輝くのみならず、來世よ大恩を施し、天地をして新鮮ならしめ、人類をして幸福な

らしむる者なり、斯の如き純理大道誰れ之を欲せざらん、
 「飲食男女の欲の心に生ずるの自然の妙理なり、此にて生
 命をつなぎ此にて嗣續を生育す世の人、僧なぞを見慣れ
 て男女の欲を拙き事の様にし思ひなすは以ての外の僻事
 なり、人此欲を断ちて心中清浄なるを覺ゆるの異端の極
 なり、欲の心に生ずるの雲の天地の間に生ずるも同じ一
 年中天地晴朗にして雲行き雨施すとなきとき、草木枯
 死して人と禽獸と皆餓死すべし、されば太虚寥廓の間は
 雲を生じ雨を施すの妙にて天地の萬物皆生育を遂ぐる
 とを得たり人も心中空虚の所は男女の欲を生じて子孫
 連續す此欲と是れ天地の正理生民の大道なり、(悟窓漫筆)
 抑も戀愛の眞善美の三要素を包含せざる可からず、理

○戀愛の三大要素

性の勢力を缺くもの、盲目的の肉欲を支配せられ、血肉の
 痴情を迷ふが故に耻辱を蒙り、心身を零落し奇怪の舉動を
 呈す、徳義の勢力を有せざるもの、淫猥醜行更らば耻ぢず、
 之を以て心身を衰弱せしめ汚名を曝す、美妙の勢力を缺く
 者は眞正の快樂を感ずるを得ず、目前の肉欲を満足して更
 らに遠大の快樂を計らず、從て究竟の目的なる幸福を得る
 能はざるなり、凡そ各個人各種族は此三大力を有するの多
 少に由て高尙野鄙の別を生ずるなり、高尙の人は誠實の戀
 愛を欲す、故に家族團樂して社會の幸福を得、國家の昌盛と
 なる、之れに反して野鄙の人の不正の戀愛を欲す、故に其一
 舉手一投足皆不潔にして妻子離散し父子相争ひ社會に淫
 猥の毒氣を蔓延し自らも亦犬死するに至る、

夫れ社會の組織の複雑なり、世の人單に政治の改良法律の發布のみを以て人生に幸福を與ふるを得べしと信ずるは蓋し偏見僻事なりとす、一國社會の根本なる家族、其家族の基礎なる夫婦、其夫婦の苦樂を支配するに於て最大の權力を有する戀愛の現象豈も等閑に附して可ならんや、物必ず本末あり終始あり、萬物運動の根據たる戀愛の正當に行はるゝの社會國家の昌盛となり國民の習慣風俗善美となるの基本なり、

男女閨門の關係の衣食と其要を等ふす、衣食ありて生命を保護するも男女の戀愛なくんば社會上に一として新奇なる元素來るなく尨雜の結果更らふ生せずして此世の無味淡泊虚空の境とならんのみ、戀愛の人生上も重大の位置

勢力を有するものなり凡そ文化隆盛の國土に於て戀愛の情緒發達し精神上快樂の基礎となるのみならず他の智識感情と並進して人生上に一大影響を與ふるものなり、故に戀愛の關係を等閑にするは正しく吾人快樂の要素を除去し社會の組織を破却するものと云ふべきなり、抑も戀愛は純潔なり純潔なるが故に自然なり自然なるが故に因襲も非ず因襲も非ざるが故に正義の標準とならざる可うらず、若し夫れ文明の起因は推進的の胃(衣食)精粹的の腰(生殖)指揮的の頭(精神)もありとせば余輩が男女相愛の現象を論じて國風の善美となるを望むも蓋し止むを得ざるなり、

第一章 戀愛の定義範圍及び目的

人の戀慕的動物なり

戀愛の定義—孟子曰人少則慕父母知好色則慕少艾有妻
 子則慕妻子仕則慕君……と夫れ父母の愛、朋友の愛、又國家よ
 對する愛等皆あ之れ愛情に相違なしと雖も其等愛情の本
 原は自愛心の轉じて兩性の戀愛となり之れよりして藝術
 したるものゝ外ならず、英語にては男女兩性間の愛情を「セ
 クスアル、ラブ」と云ひ、朋友間の愛情を「フレンドシップ、ラブ」
 と云ひ、親子間の愛情を「パレンタル、ラブ」と云ひ、國家社會よ
 對する愛情を「パトリオテヂム」と云ふ、本篇の論する所の愛
 情は「セクスアル、ラブ」にして孟子の所謂知好色則慕少艾よ
 り進んで夫婦間の範圍よ止まるなり、

禽獸蟲魚の戀

世人或は禽獸鳥魚も愛情ありと云ふ、之れ一般に認識

らるゝ如し、三千年前の鶯の高根の雲かくれし月を慕ふも
 戀あり五十六億の後の曉を待て龍華の葉を望むも戀なり
 籠になく鶴の子を悲しみ奥山に紅葉をふみわけて妻を戀
 しと慕ふ鹿など總て戀なり「艶道通鑑」と云ひ、又は「夏虫の身
 をいたづらになすこともひとつ思ひによりてなりけり」と
 云ふも、禽獸蟲魚の作用の單よ本能力の支配に由るものな
 れば迷ふときい忽ち一生を誤り他生曠劫の繼となること
 なし、思ふに禽獸蟲魚の雌雄間の關係の戀愛と云はんより
 單純なる天性の色欲とこそ云ふべけれ、又少慕父母は重も
 ん本能と遺傳の作用にして之れ亦自他の關係をも辨知し
 たる愛情にあらざるか故に戀愛と稱すべからず、我邦中代
 和歌の隆んなるときに於て父母兄弟の間よ戀の字を以て

戀愛の定義

其慕ふの意義を表はしたりと雖も凡そ戀と云ふときハ男
女の知好色以て互ハ同氣需めさそひて相引き合ひ近かつ
くの性情を指すものならざる可うらず之れを以て此情の
天真よして神聖なること明かなり

戀愛の範圍

戀愛の範圍——そも戀愛と云ふ限りは二世を契る所の男
女二人の間のみ存せざるべからず狙を定めずして矢を
放ち朝に南枝を折り夕に北枝を取り或ハ甲なる夫の目を
掠めて乙なる密夫と親しみ或ハ妻子を捨て、妓樓に遊樂
し、或ハ甲令嬢の契りを棄て、忽ち乙令嬢と結び合ひ露霜
にやだされて取定めずまどひありき親のいさめ世の譏り
をつゝむに心のいとまなくあふささるさに思ひ亂れ柴部
屋の契、露路の交、不義、密通、放蕩、淫亂の痴漢は決して眞正な

戀には戀の道あり

る戀愛の情を味ふべからず斯の如きハ昏迷の甚たしきも
のにして非禮なりスロムスカフスインダーク是等の人のジョソラポックの
所謂「コンムナル、マレージ」共有婚姻の野鄙なる蠻性を欲す
るものなり、即ち老若男女彼此交互に夫婦の用を爲さんと
するものなり、夫れ「戀」の道あり道筋たゞぬ戀ならハ
戀にハあらず姪なり、たゞ戀ばりして姪すべからず姪カ
はしきを同じく戀なりと心得違ひ本心の戀にもあらで慰
がてらに主ある妻をそゝのかし手柄のやうな思ふなぞう
たてけれ誠戀する人ならば姪すべからず而して宜しく潔
白なる二人の間にのみ戀情を運動せしむべきなり、

人間の目的

戀愛の目的——人生究竟の目的なる幸福ハ慾望の満足せ
られ快樂を現有するより來るものなり、吾人の衣服を着、飲

戀愛の目的

食を爲し住居を定め萬有の大道を知り、社會國家の爲めに善徳を行ふて邪惡を斥け、汚穢の事物を除去して美麗の大觀を造らんとするの幸福を得るの手段なるのみ、果して然らば戀愛は何の爲めに出來し何を目的として運動するものなるや、曰く再生力の作用を遂げ共々悦樂し共々悲哀し社會を繼續し國家の生命を活潑ならしむるあり、而して戀愛の發するは純善に愉快に且つ緊要なるが故なり、思ふに純善にして愉快なるもの蓋し緊要にして缺くべからず、緊要にして缺くべからざるものは純善よし、愉快なるものなり、知るべし戀愛の發する所以は愉快純善緊要の三者を待てなりたるものなるを之れを以て此道なくんば人育たず、此道整はずんば身脩らず、此道誠ならず

戀愛の主觀的及び客觀的目的

んば國家平かならざるを知るべし、政治法律の改革喧擾あるは要するに戀情の正當も行はれざるに由るなり、彼の與君相向轉相親、與君雙棲共一身、願作貞松千歲古、誰論芳權一朝新、百年同謝西山日、千秋萬古北邙塵、の將さ主觀的の目的を表はしたるものにして、客觀的の目的に至ては國家社會を平和ならしむるにあり、蓋し彼の剛勇を對するに此柔和を以てし、彼の強健に對するに此温順を以てし、陽に對するは陰を以てし、始めて調和成り、運動活潑となるものなればなり、換言すれば戀愛は精神上より國家社會に於ても陰性を以て種々なる運動場裡に潛入し、其等運動を調和し且つ美麗ならしむるものなり、此の如き戀愛は抑も如何なるものより組織せらるゝや、請ふ次章に

第二章 戀愛の要素及び調和

戀情は種々の分子より成立す

戀愛の感情は最も複雑なる分子より組成せらるゝものなり凡そ一の特色を表はすものにして總合によらざるものあるなし、彼の胡弓の如きも其の一絃を鼓動するときの若干部各其の一音を發す、而して其の一音を發する所の部分長短相同じらざるを以て音の高下も亦同じらざるを致す、斯の如きもの相合して始めて一絃の一音を爲すなり、嘗に胡弓のみならず三味月琴笙、ビヤノ等諸て音樂上の調子なるものと單一個の基音より出づるに非ざりし種々の混音より組成せらるゝものなり、又畫學上より見るときは色の細分子ありて目を刺激し視神經の之れが爲めに鼓動を受けて將に種々の彩色を生ずるものなるが如

し、又我等が一個の梅或は桃を認識し之を自覺するときには既ち某色、香味、量、形等の感覺相集合したるものなるを知る、されば轉變不可思議にして隠現出沒極まりなき戀情にして豈に複雑ならざるを得んや、

「小説的愛情及び人身の美」の著者ヒンク氏が論したる順序に従ひ左に少しく戀愛の要素を説明せん

- 第一 一人の專擇、
 - 第二 專有の權利、
 - 第三 嫉妬の念慮、
 - 第四 遠慮の心情、
 - 第五 親切の行爲、
 - 第六 我身の犠牲、
 - 第七 自設の心情、
 - 第八 過大の感情、
 - 第九 苦樂の混和、
 - 第十 同情の相憐、
 - 第十一 審美の思想
- 一人の專擇
第一 一人の專擇——夫れ一夫にして數妻を有し或は一妻にして數夫を有する所の蠻族及血慾に溺れて禽獸の如

く接しては離れ、離れては接し更らに苦樂を共にする一定の相手なきもの、優美にして高尚なる戀愛の情味を知る能はず、思ふに戀愛も進化の數を免れず、朝夕不定の愛情より一定不變の愛情を達するには種々の境遇を経て來るものならざるを得ず、些細の戀愛夫れ或は廣き範圍内に行はるべしと雖も強く且つ確乎たる戀愛は必ず一人に限らざる可うらず、他に分配する所の少なき愛情は最も深くして且つ厚きものなり、若し夫れ一人を專擇せざるもの、戀情を分析するを得ば必ずや勃々たる淫慾の分子多數を占め單に血氣の獸慾を満足せんとするに止まるものなるべし、吾人は唯一の心を唯一の情人に集めざる可からず、

第二 專有の權利——注意の性質は或る一點に心を集む

るにあり、諺に追二兎者無獲一兎と、専有は共有と兩立するものに非ず、之を以て専有の頗る干涉深くなり、自惚強くなりて益々一人のみを戀愛するに到らしむ、一夫一妻の良習を嚮導するに與て力ありしもの、此専有の權なるが如し、常々戀愛の中心燒點を專愛者に向け、膠漆の交離るべくもあらざるに至らん、専有の觀念薄しきものは戀愛の情厚からざるものなり、

嫉妬の念慮

第三

嫉妬の念慮

嫉妬は戀愛の始となり又終となる、或人曰く嫉妬は西洋料理に於ける胡椒の如く又塩の如しと、思ふに嫉妬は深きときは戀愛の調和を破却し優美奥妙の趣味を損害することあるも少許の嫉妬は却て戀情を強ひることあるが故なるべし、聞く嫉妬すること深きとき

苦痛甚だしく恰も地獄の深底までも墮落したる心地し、少許の嫉妬あるときは愉快なる情感、其の中に存在するものなりと、

又嫉妬なるものは其の人の戀愛するや否やを檢察するの試験石となるものなり、例へば或る男子の他婦と翻々として行くを見て大に苦痛する状あらん乎、是れ其人に戀着し居るの證なり、又或る女の一の男と腕を組みつゝ行くを見て平氣の様子あれば之れ其人に戀着せざるの證なり、又一説に由れば過去現在未來の嫉妬あり、自身の死後に於て他人の其の妻を娶るを嫉み之を片輪とし或は殉死せしむるの風習は未來に屬する一の嫉妬なり、又自身と婚姻せざる前の情事を聞くときは顔色蒼然として見るに堪へざる

過去、現在、未來の嫉妬

遠慮の心情

ものあり之れ過去に属するの嫉妬なり、又一度接見したりし美婦の他の男と並び行く様子杯を見ると、其の男子の地位を羨み、又自分の位地の卑さを悲む、此の悲哀羨欽の感情忽ち反動して嫉妬となる、之れ現在の嫉妬なりと、

第四 遠慮の心情——充分に云へんと欲して言ふ能はず胸裡亂れて恰も麻の如き情緒を云ふにて多くの女子に存するものなり、彼の藝娼妓の如く思の儘を曝らけ出し妾の郎君を懸慕せりと云へれたらん、其の管に忌まひしき限りあるのみならず、心あるもの、愛想を盡すに至る、之に反して遠慮的の一聲發するときは、魂魄將さに天上へ飛ばんとするの心地して益々奥床かしく、玄之又玄、衆妙茲に發して胸裡の焰の燃ゆるばかりにありぬべし、

新理
云々

尤も

親切の行爲

一説に依れば女子は遠慮の心情の烈しきとき、男子の其の美麗愛情の爲に愛するに非ずして唯困難心配の報酬として之を愛するに至る、又過多の遠慮の心情の婦人をして一般の感情を微弱なし、らめ身體上の關係より懸情力を暴出せしむるの恐れあり、故に相愛し相慕ふの風を以て常は應對し過多の遠慮を爲すべからずとなり、

第五 親切の行爲——社交上は於ても行爲の親切なると否など、大に其の交際の冷熱を分別するの基となるものなり、戀愛上に於ては此行爲重きに男子に属するが如し、即ち其親切なる行爲を以て女子をして己れを愛せしめんとするの手段とするなり、女子と雖ども男子をして愛せしめんとて盡す處の親切の行爲素より之れありと雖も甚だ間

pitiful

我身の犠牲

接にして男子の如く直接にあらざるなり、即ち容貌を裝飾し、藝術を務め、職業に勉勵し、朝夕の機嫌に注意する等の如し、故に彼の容貌少しく醜なりとも深く親切なれば、美貌にして不親切なるものより永き契りを連續するもの、如し、

第六 我身の犠牲——我身を犠牲に供して更らに顧みざるの心情の戀愛の強盛なるときに於て始めて生出するものなるべし、此情は嫉妬の念勃々たるるとき同情の感冷淡なるときは發するの理なし、然り而して此情の弊害は一轉して其の眼中には世間の評判なく、兩親なく、朋友なく、社會なく、唯依然として見ゆるもの、楊枝二本、枕二臺、口漱茶碗二個、御膳一臺のみよして深山の奥の其奥よ二人一所よ住みませうの情を發すこと是れなり、

自設の心情

第七 自設の心情——數人の戀手あるにも拘らず之れが競争に打ち勝つて日頃望みに望みし美人の情人となりたらんに、我は絶世の美人(其の人のみよ)よ愛せらるゝどの名譽心を生じ其反射に由て人をして之を見せしめんとどの自負心起るなり、

過大の感情

第八 過大の感情——情人の事は兎角見ること聞くこと細小なるものも著しき過大の事に關するものなり、例へば情人の不快なる容貌を呈するとき未だ其の何故なるを知らざるに早く既に紅涙の一掬其の袖を濕すなり、又少しく我が情人を辱さするものあれば極大の富貴を得るの話よりも尙ほ一層耳朶を刺激さするなり、茲に於て乎胸の埋火も燃ゆるなり、

第九 苦樂の混和——戀愛の情には苦樂相伴なひ二者常に包含せらるゝが如し、吾人の腦中には日々幾多の苦樂の種となるもの往來するや計るべくもあらず、此時又當りて情人の苦痛を分け、快樂を別ち、互に笑ひ、互に喜び、以て戀情を強盛ならしむるものなり、絶對的に苦痛のみなれば戀情を運動せしむるの動機なく、絶對的に快樂のみなれば戀情の腐敗を來すべし、

第十 同情の相憐——僅少の同情なれば廣き範圍に行へるゝこと明かなりと雖も、其の強く行はるゝ所の範圍の誠に狭きものなり、誰れもても苦樂を共よし永久同心となりて感ずる處の人を求むるも一人の外は得難かるべし、
 一ウヰソ曰く吾人の戀慕せざる處の人に同情を表すること

どわり然れども可愛の人に同情を表することは最も強く最も深きものなること決して疑ふべくもあらずと、

第十一 審美の思想——人の容貌の美、性質の美なるを愛するものなり、未開の人は單に容貌の美醜のみを問ふて更らに性質の美醜を顧みず、文明の人は其容貌を問ふと共に性質の美醜を檢す、而して今日に至ては精神の能力、藝術、愛情、社會に於ける位地等に注意するに至れり、然れども誰れか容貌の美と性質の美を兼備したるものを愛せざるものあらんや、凡そ世の中に人間の美なるより美なるものなし、されば我等の身體及び精神上共に理想とする美麗を粧ひざるべからず、

右の如き多數の要素相俟つて始めて正當なる戀愛を形

戀愛の進化

造するなり、然れども之れ近世文明の人に有することを望むべくも未開の蠻人に望むべからず、何となれば戀愛の情は漸々進化するものにして以上の要素を以て成り立つの戀愛は蠻人は有るものゝあらざればなり、夫れ男女戀愛の起原の肉欲フッパイトにありとはスペンサー、バイン、ダーウキン其の他近世心理學者社會學者の一致する處なり、バイン曰く爰に一の肉欲と稱すべからざる所の男女兩性の戀愛ありと雖も吾人は之を以て肉欲は愛情の基本たる礎に非すと斷言するを得ずと、余輩の戀愛の情感の即ち肉欲より進化したる者なるを認む、然り而して以上の要素能く調和したらんには其真正の勢力の強盛なる彼の哲學者の尺度外に活動し詩人の眼孔外に運轉して文筆の能く表はす限りに非

戀愛の勢力

ざるなり、試みに見よ深山の奥の其奥の清水滴たる谷の間に悅樂の聲鳴り渡り、粗食無味弊家茅屋の其中に笑聲の發するは重も何所より來れるか、終日終夜齷齪として職務を勵むは何物に對して重きを置くや、小説家詩人の描き出したるものにして何物か最も美味を含有するや、クロッケ「塲裡」トランプの席上、演劇の塲裡、縁日の夜、郡縣町村の境を超へ、種族の別なく、東西兩洋の界なく、貴賤賢愚の差異なく、吾人社會の活動する原因となり、動機となり、冷淡なる味氣なき浮き世にありて平和の神となり、溫和の佛となり、この戀愛を描て何かあらん、戀愛の情力の實に偉大なり、壯高なり、美妙なり、さればにやトルストイと幸福の要素中に質素に生活する家内の親睦を加へカルノーの愛らしき女

と伴ふことを加へたり、而して夫のルーテルの貧しくして
我妻と居ることは吾妻なくして極大の富を擁するに勝れ
りと云へり、古歌に

秋の夜の千夜をひと夜に準へて

八千代し寐バや飽く時のあらん

其返しに

秋の夜の千夜をひと夜になせりとも

詞のこりて鳥やなくらん

戀愛要素の調和

斯の如く金蘭の契膠漆の交を爲さんことを望まば必ず
戀愛の要素の適宜又調和するを務めざるべからず、
畫學上に於ける色の細分子若くは音樂上は於ける音聲
の細分子が神經を鼓動せるときは必ず相和合するを要す

若し夫れ一細分子の鼓動と他の細分子の鼓動と相容れず
衆細分子の鼓動互に別々又行くときは其の勢力や全く墮
廢するを免れざるなり、音樂に於ては音の規律なきを扣擊
と稱す、蓋し嘈雜の聲を爲すが故なり、又夫の雷光の如きは
鼓動の宜きを得ざるものよして最も目を憚らすものなり、
凡そ抑揚法なく輕重律なく大小長短定まりなきときは決
して吾人に快樂を與へざるなり、
戀愛上に於ても亦然り、嫉妬の念慮は少しく無うる可ら
ずと雖も深きときは破交の基となる、又遠慮の情是非なり
る可らず、然れども何時迄も思ふことを言表ひさずして冷
々然たるときは嫌はるゝに至る、我身を愛人の犠牲とする
の精神甚だ必要なりと雖も一步を轉すれば眼光唯戀愛の

みを見るに、至る、苦樂の混和あるの天理なり、然れども、家内の生活困難となるの日は快樂少なきが故に肉欲も重きを置くに至る、されは最も多く有すべき要素は一人の專擇、專有の權利、親切の行爲、同情の相憐、過大の感情、審美の思想之に加ふるも誠實の心の如きものなり、

兩性の好む所各差あり

然り而して男子は婦人の柔和靜狀温順優美なるを愛し婦人の男子の剛膽活潑果斷なるを愛するものなり（男なら梅さかほりて櫻さ散らん私しやいだよ柳武士）婦人を導くに涙を以てすべからず男子を導くに勇猛を以てすべからず、要するに婦人の戀の愛動的守護的なり男子の戀の自動的開發的なり、換言すれば男の智力に富み女は感情に富む、更らに一言すれば前者の科學的に進み後者の宗教的に進む、故に一の過激の進歩を欲し一は穩當の秩序を望む

ものなり、

男女の特性

「男は女に比すれば一層自由なるを以て種々の圍障の状態に遭遇するとも又多し故に女よりも速かに新奇の變態を得るなり全動物界中に於て男は女よりも變化多きものなり女は男に比すれば保守性多し故に原始の種族特性を存することも亦多しとす男は之に反して種族の近時の變化を示す大脳の發育と大脳の作用との人類に特有なるものなり人類に在つても亦男女の間に截然たる區別あり即ち男は導き女は従ふを常とす男は變化し易く又進歩的なり女の模型的として保守なり女の男よりも輿論の爲めに動かされ易し故に道義と宗教との教を守るとも男より優る

（哲學會雜誌三十一號男女精神の特性）

紫式部可愛の婦人を論ず

之を以て紫式部の可愛の婦人を論じて云へり「その果敢なげなるこそ女の可愛らしけれ賢く押立て男に従ひぬ氣にかなはぬ業なり吾も自ら歩々しく剛毅ならぬ慣心に思ふに女は唯柔和にて適には人より欺かるはどなるがさ

すがに物耻しく夫の心に従ふなるを却て憐れにて其の夫の心の儘に取直して見んに實に懐かしく覺ゆべき云々、然れども婦人を器械の如く玩弄するに至ては男子の罪甚だ大なるものなり、而して彼の男尊女卑の習慣、藝娼妓、夫婦閨門の不穩等は皆男女特性の不條理に進みたる結果なり、戀愛の調和を保たんに必ず先づ天然特有の性情を記憶せざる可うらず、

婦人の戀の様

「火鉢の縁に寄りかゝり鐵箸もて灰を掻き撫でつ何心なく書く文字もつい其人の名所に我が心付四邊見まわしホツト息人を戀ふるは誰れにてもかういふものか馬鹿らしいと思へども戀しきと思ひに沈むる婦人の戀の様なるが如し、又

「有方さまを見初し此方寐てハ夢さめては幻其面影が身にそいて忘れもやらでいがかせん乱れ心やかた糸のよるくここの思ひ草あ

わぬ心は霜枯の葛の下葉の蟋蟀恨みてハ泣きなきては恨む因果なり哀れ自らがふみを一筆かくも身もあるは料紙のたもてに數を盡して有方さまにおくり参らせ少し返詞のあるならば生ての時は申すに及ばぬ死しての後まで物語にせんと思ふ心を君が知らればいさゝ思ひひまきさり草葉末に結ぶ露の身の消ぬ其間に一夜の契りあれかしと思ひ寐る夜の夢ハ唯いく度見ても君の面影かゝる寢覺めの淋しさよ戀風そよこつまさかならすまで君が訪るかと思ひこがる、あま小舟こがれて物を思ふらん」

之れ能く婦人の戀様を表はしたるものと云ふべし、故に婦人は離るゝ事を好まずして執着心の強きものなり、又男心は秋の空と同じく變り行くと俗の唱ふるは全く特有性の不條理を發達せるより來りたるよて正當の發達を爲したるもへは必ず相和樂調和して永遠限りなく添ふの心なくんば、らず、

吾の道徳力を區分するときの愛情の勢力と畏懼の勢力の二種となる、愛情に反する者の嫌惡にして、畏懼に反するものは希望なり、而して快樂なるもの愛者と被愛者の間に調和するより起り、苦痛は二者の不整頓即ち調和せざるより發するものにして其の結果は嫌惡に外ならず、凡そ畏懼するものは苦痛にして希望するものは快樂なり、即ち將さに來らんとするもの、快樂なれば之を希望するも苦痛を與ふるものなれば之を畏懼するなり、抑も愛情と嫌惡は感覺と直接不間にして甚だ近く畏懼及び希望の感覺は間接として遠し、前者は自己の外に愛憎するものを有すと雖ども後者の畏懼は唯自己にあるのみ、彼の自愛は之に背

反するの觀ありと雖ども是れ亦自己を愛するものなるが故に自己と云ふ愛せらるゝものあるなり、故に愛憎と云ふとき必ず其の愛憎せらるゝものなかる可からず、換言すれば、愛情の感覺は常に客觀的にして、畏懼の感覺は主觀的なり、

愛情に既に述べたる如く兩性、親子、朋友、親族、國家等に對するものあり、畏懼に神佛、妖怪、疾病、暴戾に對し或は惡事を働きたるとき等のものあり、此章は論せんとする所は前者の愛情にありとす、

若し人ありて人間の感情中食欲に次ぎて何物も最も直接にし、強勢なるやを問ふものあらば余輩は直ちに兩性の情欲、ち再生力の作用を以て種族を保續する所の男女

親子の愛情

間に發する天然の性質一言すれば相互に引合ふの情感なりと名へざるを得ず、此情感に次て種々の愛情發生す、即ち第一、親子の愛情、第二、同統親族の愛情、第三、朋友の愛情、第四、國家に對する愛情、第五、博愛心、第六、自愛等は是れなり、此章に於ての戀愛に次きて發生する以上の愛情を論述せん、

第一、親子の愛情——夫れ兩性の戀愛に次きて家族の結絆となるものは此親子の愛情なり、蓋し親子の愛情なくんば家族の結合社會の組織成立するの理由あるなし、此情を分ちて二種とす、第一、親より子に對するの愛情、第二、子より親に對するの愛情是れなり、第一、親より子に對するの愛情は最も強烈にして且つ深遠なるものなり、特に母親の子を愛すること更らに父親に勝ざるの觀あり、そは父親の男性と

第一、親より子に對するの愛情

して常に子の行爲に對して淡泊に之を執行ふも母親は其の子一切の行爲に對する日々の其の憂愁と其の愛情の切なる外目より見るどきの殆んど狂へるが如し、チャーレス・ダーウソン曰く、如何なる感情にても母親の愛情より強勢なるものあらず、と思ふも兩親の愛情は自ら子を持つて始めて了解すべきものなるべし、

父兮生我、母兮鞠我、拊我畜我、長我育我、
顧我復我、出入腹我、欲報之德、昊天罔極

(詩經蓼莪)

人の親のこゝろとやみにあらねども
子と思ふ道よまよひぬるかな
世の中よ思ひやれども子をこふる
思ひよまさるおもひなきかな

親を思ふこゝろにまさる親こゝろ

今日の音づれ何と聞くらん

親の心は皆

而して親の子に對する愛情は貧富、貴賤、賢愚の別なく各人皆な同一轍に^一出づるが如し、素より自己と他人の關係を辨せず天然の勢力に支配せられて受動的のみ運動する蠻人の例外なれども凡そ社會が自覺する事ありて發動的に運動する所なりせば「三千世界に子を持つた親の心の皆一つ」と云ふも敢て不可なからん、又「親を思ふ心にまさる親心」と云ふも眞理なりと斷言せざるを得ず、然れども其人の教育を受けたる程度即ち精神現象の文野の差異も由て同人種中にも子に對する愛情を表はすの方法を誤り却て子供をして惡習慣に陥るらしむる事あるも是れ其智識經驗の

父親の愛情に厚薄あるの理由

不足より致す所なれば之れを以て愛情に厚薄の差異ありと斷言するを得ず、若し夫れ親の子を思ふ所の感情もして薄らぐ事ありとせん乎、其の場合は甚だ稀有例外の事にして歸納論理場に入らざるのみならず倫理の原則に戻るものなりと云ふも不可ならん、例へば其の妻の一女子を遺し空しく黄泉の客となりたる後妻を娶りしに間もなく男子を産みしが其の子の成長するに従ひ後妻の之をして家續人と爲さん爲めに奸計を回らして前妻の子を惡み夫をして之を追出さしめんとする如きことなきにあらず、又藝娼妓に狂迷し殆んど家産を虚空として妻子を惜氣もなく追出すと又之あるなり、父親のかくする事我邦に於て近く見聞する所なり、母親は之に反して追出さるゝも尙ほ子と

共にありて深く愛情を注くなり、熟ら其の原因を見るに第一、藝娼妓の色香則ち色欲に狂ひたるより一時天性を壓抑されて藝娼妓に關する觀念が本妻や子女に對する觀念に勝さり即精神界に於て生存競争に勝ちたるなり、然れども一旦夢醒むれば天性に回へるや疑ふ可うらず、第二、女子は保守性のものなるに男子は進歩性のものなり、前者は堪忍に富む、故に貞操を守る、後者は新奇變化を好む、故に妻子あるものも美目の如何に由て心を轉す、女の戀性は受動的にして男の戀性は發動的なり、之を以て藝娼妓に迷ふ如きとありとす、第三、習慣風俗の如何よて若し我邦の如く社會の良心が藝娼妓を狂ひ妻子を捨て、妾と爲すの事實を以て深く呵責することなく中には之を名譽の如く持囃す所に

於てハ父親の變るも亦無理なきが如し、我邦に於て男子の放蕩を導き女子の卑屈を來さしめたるもの、近因ハ封建制度及び儒佛の道德説にあるなり、要するに男性なる父親の種々變化あるは遺傳、教育、順應、風俗、習慣に由るものとす、親子の愛情ハ時と所に由て即ち少壯の時と老衰の時とに由て多少の差異なきにあらす、ダーウヰン、及びカイペンターは未だ自立し能はざる子供に對して愛情を深く注くと云へり、思ふに父母の膝下ハありて日夜起居を共にする時と獨立して遠き旅路にありて商賣其他に従事するときとに愛情の厚薄なかるべきも尙ほ其の感する所は多少の差異なきを得ざるなり、

子の親に對する愛情

第二、子より親に對する愛情ハ古より親の子に對する所

の愛情に比すれば遙かに淺薄なりと唱ふ、諺も親の愛ひの十分の一を子に有たしめたらんは彼れ能く孝子たらんと云ひ又「親を思ふ心にまさる親心」とい即ち其の理を表したるものなり、故に古より孝子とは甚だ稀有なるものゝ如く常に之を稱賛して彼れの如くなるべしと教ふるに至れり、若し夫れ親を思ふ心にして親の思ふ心に勝さることありせば孔子の道德論或は起らざりしならん、果して然り親の子を愛すること深く且つ一般に行はるゝが故に子を教育する方法或は順序等を教ふるものありと雖ども未だ子を愛するの情感薄きが故に親たるもの子を愛せざる可からずとの道德説を切に主張したるものあるを見ず、是れ親の愛情の一般に深く行はるゝを證するものと云ふ

親子の愛情
發生する原因

戀愛の比
論

べし、然り而して親の愛情の第一、本能、第二、習慣、第三、遺傳、第四、同情、第五、憐憫等(下等社會にては利慾の分子を含む)の要素ありて起るものなり、子の愛情の憐憫の代りに欽仰あるのみにして前要素を包含するが如し、試みよ戀愛と比論せんよ親子の愛情には戀愛上の如く美術的の思想なし、即ち親の容貌の美醜に由て之に孝道を盡すの差異厚薄あることなし、子に對する親の愛情又然りと云はざるを得ず、然れども性質の美は互の正當なる愛情を恆久ならしむるものなるべし又此愛情に再生力作用の關係即ち兩性的情欲を含有せず、古代に於ては之れありしと云も之れ全く社會に自覺なく受動的に生活したる蠻人の間なるのみ、今日よ於て若し之れありとせば前妻の子と後妻の關係の如き或は後夫の前夫の娘よ於けるが如けん、

然れども是等は禽獸の行爲に均しき者なるが故に現今の於ては社會道徳の禁制する所なるのみならず明かに國家の法律上に於て禁制する所なり又此情に嫉妬の念慮なし嫉妬の念慮なきも親子間の愛情には嫉妬するの必要なく従て之あるなし然れども一人の專擇專有の權利親切の行爲我身の犠牲、過大の感情同情の相憐は最も親子間の愛情を強むる者なり又自設の心情即ち子の良事を他人に誇稱し又親の勇氣あるを他童に誇言することあるは皆愛情の現はれたるものと云ふべし之に由て戀愛と差異ある所を明かに知る、

第二、同統親族の愛情——即ち親屬に對する愛情にして子孫に對する愛情に次ひて來るものなり思ふに各人の自己

若し他人の
子に我れは
する事の
ばり

同統親族の
愛情

と關係するものを深く愛し之れが爲に同情を厚くするも他の無關係なる人を疎んずるは自然の勢ひに出づるものなり此愛情の感覺は人爲的にして下等動物の有せざる所なり而して此愛情は其の範圍廣しと雖も博愛と異なる者なりとして社會の發達低度なる所に於て最も強大なるが如し、試みに都府と田舎を比較せば明白ならん但し社會の高度に達せれば理性は殆んど各人をして同一の光の内に置くに至らしむるものなり彼の基督釋迦の如きは一個人として高尚の程度に發達し衆生を同一無異に見做して自由平等の觀念を有したるものと云べし未開の時代に於て家族の同族主義なりしも漸々大なる體制を擴開して後ち族類、小宗族、種族、更らに進んで國民となりたるものなるが愛情

基督釋迦

も之と共に漸々發達したるなり、此愛情は美實的思想なく、再生的關係なく、一人の專擇專有の權利なく、而して嫉妬の念慮親切の行爲過大の感情同情の相憐多少存するなり、以て戀愛と差異する所を知るべし、

朋友の愛情

第三、朋友の愛情——詩に曰く「伐木丁々鳥鳴嚶々、出自幽谷遷于喬木、嚶其鳴矣求友聲」と、朋友の愛情は蓋し禽獸にも之れあるべしと雖も余輩の論せんとする所は人間の友情なり、アリストートル曰く「友を求むることは人生上最大切要なるものにして如何に莫大の貨物を有し無量の富貴を得るも友なくんば誰れしも此世に生活するを好まざるべし」と、友を求むるの要今更喋々するを要せざるなり、然り而して友情の發するや其の因縁第一、人は社會的本能を有する

友情發生する因縁

動物なるより、第二、快樂を求め苦痛を避け、實利を得て損害を除き、善徳を行ふて罪惡を滅せんとするより、第三、習慣天性遺傳より來るものなるが如し、一説に由れば唯實利即ち利己主義より來れるものなりと云ふも余輩は其の井蛙の管見に非るかを疑ふなり、アリストートル説を爲して曰く、「嚴密に云ふときは友情は徳義に非れども徳義を以て遂に結合せられたるものと云はざるを得ず吾人の天性なる愛敬の感情及び慈仁寵愛の如きものは友情の基礎となりたるものなり、若し之れをして教練し正當に嚮導する事あらん乎必ず各人をして道德上及び社會上の義務を行はしむるに至るべし、加之此情は吾人々類の幸福を形造るに於ては高尚なる總念として必要なるものなり」と、而して其勢力

アリストートルの友情起原説

の政治上に迄及ぼすことあるを論せられたり、氏の説敢て余輩と異なる所あるを見ず、之れより少しく友人の種類を分たんに

友人の種類

第一、飲食の友——飲食の時最も親しく飲食盡きて其情冷うなるものあり、之を食欲的の友人と云ふ、第二、談話の友——同情相憐するの觀念なきも互に或事よ就て談話するを好むものあり敢て其實全身を投じ其人の爲に盡すの念なし、第三、放蕩の友——互に放蕩するとき最も親し、一方の人若し放蕩を止むるときは人に由て冷交となるとあり、又一層以前に劣らざる聖交を爲すに至るとあり、第四、主義の友——政治上、宗教上及び社會改良上同一の主義を有する者なり、同主義を有するも時と所よ依て親しき者と親しうらざる

者あるは人生上免る可からず、第五、同郷の友——遠き旅路にあると郷土にあるとを問はず、又其人と主義合するに非ず共に放蕩せるに非ずと雖とも唯同郷人なるが故に親むものあり、第六、眞實の友——互に信用し苦樂を共にし主義を共にするものは同性の間に求め得ざるに非ず、コロソウキルとミルトン、フランクリンとワシントン、オーコンナルとグラッド、ストーン、管仲と鮑叔の交りの如き、同性友情の稱賛すべきものなるべし、然れども永久不易の律法を全ふするの愛情は戀人の間に行はるゝのみ、
アリストートルの説に由れば友人に三種類あり、娛樂の友、實利の友及び善徳の友、之れなり、前二者即ち娛樂の友及び實利の友の偶然的のものなるが故に若し其の娛樂實利

友人の種類
に關するア
リストートル
の説

にして消滅すれば忽ち其の友人も消滅するなり、夫れ實利は時よ由て異なるものなれば永久も不易たるを得ず、悞樂亦た然り、思ふに實利の友は老人の間に多く、悞樂の友は壯年の間に多きが如し、又た壯年の人々は戀愛を欲す、戀愛の要部は情欲より起るものにして快樂なるが爲めなるべし、然り而して爰に殆んど完全なる友は何なりと問ふものあらば猶豫なく善徳を以て結合する所の友なりと答へざるを得ず、善徳の友は自他共善徳たるを欲する者なり、此友は偶然的の者も非ず善徳の觀念存する間は必ず永續するなり、蓋し善徳の永久のものなればなりと、氏の區別は將さる内包的にして余の區別は外延的なりと云ふも不可なからん乎、即ち放蕩の友及び談話の友の如きは悞樂の友も入

るべく、主義の友、飲食の友は實利の友も入る可く、眞實の友は即ち善徳の友に包有せらるゝなり、友の吾人も切要なることは既に述べたる處なるが、ホーマーの「エリヤド」も其の功力を述べて云へり、

“By Mutual confidence, and Mutual aid,
Great deeds are done, and great discoveries made;
The wise new prudence from the wise acquire,
And one brane heroes fans anothers fire.”

Pope, *Hom.* II. X. 265.

愛國心

第四、國家に對する愛情——親子、親族及び朋友に次きて文明の進歩と共に生出するの愛情の即ち愛國心なりとす、此心情の漸々穩かき發生し來るものなり、蓋し全社會を愛する處の愛國心も自己の故郷をも平均も靜穩平和たらし

めんどの情を含有す、或人曰く若しも全世界よして一の廣大なる政治社會的民政となるの日あらを唯一宇宙を愛するの主義のみ何所よ至ても存在するお至るべしと、此説大に「ヒューマニタリアニズム」と同一轍お出でたるなり、

愛國心の培

愛國心を隆んならしむることは云ふまでも無く國民として必ず有せざる可からず、各人に之を培養するを務むるは蓋し教育者の任にあり、然りと雖も境遇亦人を造るとあり、老子曰「大道廢有仁義、慧知出有大偽、六親不和有孝慈、國家昏乱有忠臣」と、思ふに愛國者の續出せんことを望まむ教育を隆んよするよ若かすと雖も愛國者の現出するよきよ多く昏乱の時代にあるが如し、ガルバルデーの以太利に於ける、ピスマーックの日耳曼に於ける、楠公の本邦に於ける、基督の

猶太よ於けるエパミノングスの齋武よ於る皆、外界よより一、大刺激力の襲ひ來りて内よ養はれたるものよ適合し始めて發出しよるものなり、彼の日夜醒醒として飲食よ追はれ、虚名よ汲々し、酒色よ溺れて更らに遠大の思慮なく、高尚の主義なく、朝よ東よ媚び夕に西に僞笑し飄々乎として浮沈極まりなきものは未だ以て愛國者となる能はざるあり、

愛國心の起

先きに教授元良勇次郎氏は「愛國の心理」と題して大日本教育會雜誌第八十八號よ掲けたる中よ愛國心を發するの原因を論せられたり、其の要旨は「第一、先入主となるの次第よて先きよ這入よ心が善惡を判斷するも不潔正潔の區別をするにも始めよ這入たものが標準となつて其の後ちのものよ定むること、第二、故郷の父母親族及び竹馬の友等あ

るが故に其の所よ云ふべうらざる感覺あり、第三、山川風月を見て自分の子供の時の曇氣のない快樂を思ひ出して來る之れ故郷を愛するの三大要素なり、又遠國よ行き言語の違ふより故郷を思ふよ至る之れ第四なり、風俗習慣の異なる所より色々の不都合を感じて故郷を思ふよ至る、第五因なり、第六の食物の事なり、食物は人の心を支配するの力あるものなり、第七は人種の事にして人種異なれば一國を爲し一國民を形造ること大に難し又相互に憎み合ひ聯合するの力甚だ弱し、第八は宗教上の關係なり、宗教の國家と密着の關係を有す、國家の器械となりて總ての人民を結び付くる一の器械として宗教は切要なり、宗教異なれば人民の結合上不都合あり、第九は其の國々に於て得る所の爵位、財

産等よて其の國よ於て大に榮譽を與ふれば其の人は勢ひ國を愛するに至るなり、故に愛國心を養育し發達せしめんには以上のものを眼前に現はして置かざる可からずとなり、

博愛

第五、全人類よ對する愛情——愛國心に次ひて發するものを博愛心とす此心情は全人民よ對して恰も親近なるもの如く夫等の幸福安寧を得んことを望み之を愛するを云ふ、釋迦基督の如きは博愛心の頂上よ達したるものと云ふも敢て不可なからん、

右に述べたる種々の愛情は道德世界よ於て觀念の制裁上正面的の衝動となるものなり、故に社會上人間よ關する制度を保存するよ於て切要なること明らか、從て其の影

愛情の切要
及び影響

響する所亦大なりと云ふべし、親子の愛は幼兒及び粗忽なる子女を保護し兄弟姉妹の愛は家族及び親族の間を和樂調和せしむ、而して愛國心は國家の生命を活潑ならしめ、以て國家の經濟及び工事上の制度設置を保護して穩當ならしむ、又博愛は凡ての人類に柔和、寛仁、慈悲、安全、及び温和、幸福等を與ふるに力あるものなり、

自愛

第六、自己に對する愛情——自己を愛することは愛情中に於て最大の力あるものなるべし、自愛は時に卑劣なる利己主義、傲慢及び自惚等を形造るものなり、余輩の不完全なる人間は何處に至ても其等の萌芽する者あるを見る、然れども又自重自尊の性情を惹き起すの動機なり、而して自愛の將來に關するものも冒險的の功名心あり、

冒險的功名心

アンソニオン

冒險的功名心は「爲さんとする」或者たらんとするものである、人は常に此冒險的功名心に由て鼓舞せられ、誘引せられ、且つ培養せられ、安慰せらるゝものなり、自愛自重より直接に來る所の普通一般の同伴は他人より愛せられ又重んぜられんとする欲望に過ぎず、雖も冒險的の功名心の大は社會の情態を變化せしむるものなれば社會の非本素力中最も大切なるものなり、余は思ふ、一個人、一家族、一社會及び國家、於て此冒險的功名心を有するの多少は、由て文野の差異あるものなりと、昔日の羅馬、埃及、今日の「アングロサクソン」人種と支那、朝鮮、印度の今日を比較せよ、素より國風又天然の境遇等種々様々の原因より來るなりと雖も、一冒險的功名心を養はざるに由る者なり、我邦の多數の人は

我邦人は功名心乏し

角袖の不自由なる衣裳を着し、緩々として六疊の間へ籠城し、其動作起居因循姑息に流れて金蒔繪の重箱を眺め、煙草の側面に安坐し、摺鉢摺棒の悠々主義にして大に老衰せるの氣風あるは誠と嘆すべきとなり、功名心は絶対に純潔ならずと雖も活動的にして進歩的なり、凡そ男子は背水の意匠を以て常に少壯の氣風を帯び活潑々の氣概なかるべからず、蓋し之れ男子の天真なり、女子の天性の保守的なり秩序的なり柔弱的なり、此等の二者合して始めて國家の平和を保つに至るなり、

愛情は相對的なり

愛情は常と相關對立的の者なりとす、故と愛好と對する嫌悪あり、戀しき人あれば戀しうらざる人あり、親しき友あれば忌むしき友あり、良き親族あれば嫌はしき親族あり愛

愛情と死の關係

する所の國家あれば惡む所の國家あり、故と愛好に對して嫌悪なきの情を求めたらんに唯だ博愛あるのみ、若し云ふべくんは自愛も入るなるべし、何となれを自己を嫌悪するとなければなり、凡そ如何なる愛情にても正當と發達せしむるは教育者の任とあること素より明了なりと雖も演劇、詩歌、小説等と於ても注意して之を進歩せしむるを要す、
最後と一言すべきは愛情の爲めと生命を惜まざるの一
事なり、戀愛の爲めと身命を捨つるものは最も多く、親の爲めにするもの之と次ぎ親族朋友の爲にするもの少なく國家の爲め君主の爲めにするも更らと少く博愛の爲めと死するもの殆んどあるなし、古人戀情の爲めに死するを論して曰く

角袖の不自由なる衣裳を着し、緩々として六疊の間へ籠城し、其動作起居因循姑息に流れて金蒔繪の重箱を眺め、煙草の側面に安坐し、摺鉢摺棒の悠々主義にして大に老衰せるの氣風あるは誠と嘆すべきとなり、功名心は絶対に純潔ならずと雖も活動的にして進歩的なり、凡そ男子は背水の意匠を以て常に少壯の氣風を帯び活潑々の氣概なかるべからず、蓋し之れ男子の天真なり、女子の天性の保守的なり秩序的なり柔弱的なり、此等の二者合して始めて國家の平和を保つに至るなり、

「恩の爲め死するもの義の道をふんで誠の道も出るなり、情の爲めに死するもの誠の道よりまことと出る道なり、その味よく思ひはからふべし、泰山より重き命を鴻毛より軽く捨る事、大かたよてなる可きわざあらず、心も感じ動く所ありて其誠といふもの見えざれば重きことまた泰山を百合てかけあいなきものなり、その誠の重さよくらべて一泰山の命の鴻毛よりもかるければ捨安くなる也、去よより世の謬にも恩の主より情の主といへり、いかに給分をくれ扶持し置ても其恩は世なみ人なみの事として強てはこることよあらず、足手をはこび身を働くこと、其の恩の爲めよつかひるゝなり、唯心に感じて命を捨つるもの情ぞかし、」(鈍道通鑑)

古歌よ

ほどゝぎすなくやさつきのあやめ草

あやめも知らぬ戀もするかな

人を思ふ心の我れにあらぬや

身のまどふだにしられざるらむ

我戀はまらぬ山路もあらなくよ

まどふ心ぞわびしかりける

ウ井クトルユーゴ一云へらく「戀する爲めに苦まば益戀せよ戀も死するの戀を遂くるなり」と、げも戀情の蝶堂も入るときは目よは父母なく、社會なく、國家なきに至るが故に死も軽くなるべしと雖も余は之を以て戀愛の強大なるものとせざるのみならず、忌まわしと云はざるを得ず、戀愛の

恋の強

運動する處の素より哲學者詩人等の眼孔外にあるものなれども國家社會の幸福を計る範圍内にあらざるべからず、而して又美妙純潔の分子を包含せざる可からず、蓋し戀愛の爲めに死を願みざるに至るの之れに執着することの深く關係する處厚きが故なりと信ず、然れども余輩は望む朋友の間、親族の間、社會國家の間、及び全人民に對する處の愛情をして彼の戀愛の如く強からしむることを、之れより本篇の主眼なる戀愛を説明するの運に至れり、

第四章 戀愛の種類及び表出

戀愛の種類

人の皆戀愛する動物なりと雖も其の人の性質と境遇の如何に由て其の戀愛するの期に多少の早晚あり、而して此章に於て論究せんとする戀愛の種類は各個人別種類の戀を爲すとの謂に非ずして、一個人にて其の境遇に由りて種々の戀しきことありと云ふにあり、即ち袂を分ちて旅するときの別れを惜むの情と共に戀愛の上にも惜別の感あり、其の他相逢ふとき相見るとき其れに應じて種々の思ひあるを説明せんとするなり、

運戀

思ひ廻せば去年の秋、フトした事が縁となり、一旦心を染めしより、一日別るゝも千秋の思ひ、一と時も逢たさに心奪われ、今頃はさぞ如何ならんと思ふの戀は即ち逢戀なり、古

わだのそこおきをふかめてわがもへる
きみよのあわんどしのへぬとも
わが戀のゆくへもしらすはてもなし

あふをかぎりと思ふばかりぞ

「かつ見るだにあかぬ御さまを、いかでへだてつる年月ぞ
と、あさましきまでおもほすに、とりかへし、世のなかも、い
どうらめしうなむ」

(源氏物語 明石)

戀しく思ふて逢いんとするも又逢ふて戀しと思ふも同じ
く逢戀と云ふも不可なからん

「五たんの御すほうのそじゆめて、つゝしみおはしますひ
まをうかいひて、例の夢のやうに聞え給ふ、かのひかしお

ぼえたるほそどの、つばねに、中納言の君まぎらはして、
いれたてまつりたり、入めもまげき頃なればつねよりも
はしぢかなるを、そらおそろしうおぼゆ、朝ゆふに見たて
まつる人だよ、あかぬ御さまなれば、ましてめづらしきは
どにのみある御たいめの、いかでかはおろかならむ、」

(源氏物語 賢木)

忍戀

格子戸の中、六疊の間、獨り戀しき人を思いやり、埋火の焰や
るせなく最ども憂愁を沈み入る、かゝる所は侍女杯の入り
來り性しき容態と問はれたらんに、顔は紅葉を呈するな
るべし、人知れずと思ひを注ぎ、言傳ふする便りもなく、獨り
忍びくゝて戀するを忍戀と云ふ、古歌に

忍ぶればくるしきものを人知れず

思ふてふこそたれにかたらん
忍ぶれど戀しきときいあし引の

やまより月のいでこそくれ

凡内に情あれば外も形へる、其の種々なる表出即ち感覺の
顔面に現はれたる様を研究するは心理學者の義務なり、
「グン」氏の「人間及禽獸の情緒の表出」を著し大に容貌
の感情と關係する所以を説けり、余輩の常も内もある情緒
の外も現はるゝことあるの事實なりと信するものなり、古
歌よ

思ふおは忍ぶることぞまけよける

色にぞ出でじと思へしものを

忍ぶれど色に出でよけり我戀の

片思戀

ものや思ふと人の問ふまで

及ばぬ事と幾度う心で心も意見して嗜めばなほ嗜むはを
たしなみぬる煩惱は抑へんとして抑へられず、彼れ木石
にもあらざるべし、朝夕に顔見合する折りさへあるものと
思へどくらせど更らに効なし、古歌に

もろこしも夢も見しかばちかゝりき

思はぬ中ぞはるけかりける

行く水に數うくよりも果敢なきは

思はぬ人を思ふなりけり

おひ思はぬ人を思ふのおふでらの

かきのしりへにぬかづくがごと

片思の性情

片思戀と悲哀の性質あり又落膽の情狀あり、之を以て苦痛

なるものなり、彼の戀の煩ひよて病を惹き起すは一の事實
なるが片思戀も一の戀病を起すも足るの性質あるが如し、
而して悲哀落膽心配の血液の循環を遅くし身體運營の働
きを鈍くし顔色をして青白たらしむるものなればなり、然
りと雖も片思の戀愛の出立點なり、又誠實の分子を含むも
のなり、古歌よ

おもへどもしるしいなしとしるものを

なぞこゝやくもわがこひわたる

思戀

風の日雨の夜花を見月を眺め戀しき人を思ふとき、堪へ
くゝて縫ひかけし仕事も手も就かず、思はざらん忘れまし
ようと思へば却て忘れず忘れよふと思ふと既思ふに
して思ふまへ予と思ふも同じく思ひ、モ一知らぬと投出し

ても知らぬと決する思ひあり、止めんとして止められぬの
心の思なり、強ひて之を止めんよは眠むると死するの二つ
あるのみ、凡う思ひ考ふることの強くして精神界の優勝と
なる觀念の最も自らに關係するものなるべし、故に學者も
學術探究に狂ふ如きの様を呈するなり、鹿を獲んとする獵
師も亦山を顧みることなし、夫れ然り、戀人を思ふの情何ぞ
獵師の鹿を追ふに劣らんや、古歌に

かたみこそ今はあだなれこれなくバ

忘るゝときもあらずしものを

わが戀のひなしきそらにみちぬらし

思ひやれども行くかたもなし

人まれば思ひのみこそわびしけれ

我がなげきをばわれのみぞしる

「あやしくあくがれたるこゝちして、何ごとぞやまたわが
心よ思ひくはくれるよと、おもひいづれと、いとよげなき
ことなりけり、あなもののくるをしと、とさまかうさまお
もひつゝ、云々

(源氏物語 野分)

見戀

不圖何某の宴會よ於て一美形を見染めしより戀の種の萌
芽するの(其の性質よ關する是非はおきて)事實よ於てある
ことなり、古歌に

山ざくら霞の間よりほのかにも

みてし人こそこひしかりけれ

雲間よりほのみし月の如何なれば

身をも離れぬ影となりけむ

「おどいの、姫君の御かたにおいしますはとに中將の君ま

ゐり給ひて、東のわたせのゝこざうしのかみより、つまど
のあきたるひまを何心なく見いれ給へるよ女房あまた
見ゆれば、たちどまりて、おともせで見、御屏風もかせの
いたうふきければ、おしたゝみよせたるに、見はしあらは
なるひさしのおましよゐたまへるひと、ものにまぎるへ
くもわらず、けだかくきよらに、さとうちにほふこゝちし
て、春のわけばの、霞のまより、おもしろきかばさくらの咲
みだれたるを見るこゝちす、あぢきなく見奉るわがかは
にも、うつりくるやうに、あいぎやうはにはひちりて、また
なくめずらしきひとの御さまなり、みつのふきわけらる
ゝを、人々おさへていりにしたるにうあらん、うちわらひ
給へるいとみしう見ゆ、花をもを心ぐるしがりて、え見

すて、いり給はず、おまへなる人々も、さまぐにものきよ
げなるすがたどもは、見わたさるれど、めうつるべくもあら
ず、おとこのいとけとほくはるかよもてなし給へるは、うく
見る人たゞにはえおもふまじき御ありさまを、いたりふか
き御こゝろにて、もしうゝることもやとお祈すなりけり、と
おもふに、けはひおろしくて、たちさるにぞ、にしの御方よ
り、うちの御さうしひきわけてわたり給ふ」

(源氏物語 野分)

不見戀

見戀に反して不見戀あり、近頃の小説家にて爰に着眼して
稿を起せるもの甚だ稀なり、不見戀は男女共にあること明
かなりと雖ども女に於て多きが如し、古歌に
いよしへのありもやしけん今予知る

まぶ見ぬ人をこふるものとの

世の中のかくてぞわりけれゆく風の

目に見ぬ人も戀しかりけり

「ひとがらのいとまめやうなれば、おげなさをおもひよら
ねど、さやうならむ人をこそ、おなトうは、見てわかしくら
さめ、かぎりあらむいのちのはともしますこしめ、かなら
ずのびなんかしとおもひす、けゝる」(源氏物語 野分)
聖經に「夫れ信仰は望む所を疑えず未だ見ざる所を憑據と
するものなり」とあり、實に宗教上の信仰のみならず、一切の
社會に於る信仰の性質皆な斯の如し、不見戀は一の信仰な
り、猶や宗教信者の本尊の体を肉眼にて見ざるも其の心情
を靈眼よて見ると云ふ如く、其の人の肉休容貌未だ之を實

疑戀

見せずと雖も其の人の學力あり、能力あり、文藝あり且つ剛毅にして威あり、膽あるの風を戀し居るなり、然れども容貌の風評に戀し居るもの亦なきよ非るべし、
 噫年々に花と似つれど人心、昨日の笑も今日の怒、變らじと思へど變る世の習ひ、變ることのみ變らざりける、桑田も變じて碧海となる、浮世の常、昨日の淵も今日の瀬と、かはるの雷に飛鳥川のみならんやと少しの事に疑ひ起り一念暗鬼を生じて見るもの聞くもの皆疑ひの種となる、古歌に

秋風に山の木の葉のうつろへを

人の心もいかゞぞ思ふ

蟬の聲きけべかなしな夏衣

うすくや人のならむと思へば

わが袖にまだき時雨のふりぬるは

君がこゝろに秋やきぬらむ

吹まよふ野風をさむみ秋はぎの

うつりもゆくか人のこゝろの

恨戀

われ程までに契り合ひ何んの彼んのだ言張つてオー恨めしひ、今更思へば此形見も此手紙も今は却て仇なりと思ふを恨戀と云ふ、其の情人を惡むにあらず、其の情人を恨むにあらず、其の惡むも恨むも唯戀愛の相思となりて和樂するを希ふのみ、所謂其の行爲を恨んで其人を恨まざるものなり、古歌よ

ありそ海のはまのまさをたのめし

忘るゝことの數にぞありける

ふく風も去年のさくらは散らすとも

あなたのみがた人のこゝろの

獨り鏡臺に對て色香のうつろふを見れば千行の紅涙不知して袖を濕はするに至る、

恨みてもなきでもいはんかたぞなき

鏡も見ゆる影ならずして

こめやどの思ふものから、ひぐらしの鳴く夕暮のたちまたれつゝ、今か今かと左視右顧する間もあらず、眺めらるゝと圓かなる月、聞ゆるもの、鐘ばかり、古歌に

月夜にのこぬ人またるかきくもり

雨も降らなむおびつゝもねめ

今のこじと思ふものからわすれつゝ

待戀

またるゝことのまだもやまぬか

待戀の性情

萬籟寂として物靜かに蟲の聲も聞えず……草葉の露にぬらされてか、實に却恨合情掩秋扇空懸明月待君王の時なり、待戀は逢ふた時の有様を想像することの樂みあるも待ちつゝある間は大に苦心するものなるべし、實に十分間も十時間の如く思はるべし、左の俚歌は能く情態を穿てるものゝ如し、

「秋の夜はながいものとはまんまなるな月みぬ人の心かもふけてまてとも來ぬ人のおとづるものは鐘ばかり數ふる指のねつおきつわしやてらされて居るわいな」又た「いっゝおもへると、けしきも見がてら、雪をうちはらひつゝ、まかでゝなまひとわろくつめくるれど、さりどもこ

よひ、日頃のうらみ、とけなれどもう給へしに、火波の
かに、かべにそむけ、なへたるまぬどもの、あつこえたる、お
ほいなるこにうちかけて、ひきあぐきもの、かたびらな
ど、うちあげて、こよひばかりや、と待けるさまなり」

(源氏物語 帚木)

誓戀

右の待戀の一例なるが、爰又誓戀なるものあり、古歌に

梓弓まゆみ槻ゆみすねかけて

誓ひし言葉引なたがへぞ

通書戀

又通書戀なるものあり、近時の小説家として之を描くもの
あり、通書戀の艶文を送りて其の意を通することなり、古歌
よ

ふみやれば水草おひぬる岩ふちの

ふのき心も見えんどのおもふ

増戀

一旦戀愛して後ち境遇より由て戀愛の焰を消すことあり又
隆ん燃やすことあり、焰を消すの悔戀の部より屬し、焰を燃
やすの増戀の部より入るものなり、古歌より

信濃なる淺間がたけの烟も

立まさりゆくおもひなりけり

蘆邊より滿ち來る潮のいやましに

君よ心をおもひまをかな

「年おろあわれとおもひさこえつるの、かたのしよもあら
ざりけり、ひとのこゝろこそうたてあるもの、あれ、今の
ひと夜も、へだてむことの、わりなかるべきとおはさる」
「かくてのちの、うちよも院よもあからさまよまわりたま

別戀

へるほそぶよ、まづ心なく、おもかげにこひしければわや
 しのこゝろやどわれながらおぼさる」(源氏物語 葵)
 千秋萬古北邙の塵とならんを望み、貞松の千歳も古うらん
 事を思へ花際も徘徊したる蛺蝶も今は我身も比べられ池
 邊に願歩する鴛鴦もさほそねだましくもあらぬ身となり
 て

獨のみ眺めし庭を今日よりぞ

二人しづけく看るぞうれしき
 と歌ふ間もなく洋行と出かけし、新夫なり、此の時の情状
 の悲哀の感顔色をして青白たらしむ、今一度おかほを見せ
 たまへ事とはぬ草も木も雲水空のなごりまで今を限りの
 別れとや、いつも風もふきければ今宵の風を身にこしむ、近

松著作集(四圍の事物などなく惜別の情を増し、見るもの
 聞くもの憐れならぬ)なし

おもふことこゝろのうちよのこしおきて

またあふまでのたのしみにせん

命あらばあふよもあらん世の中に

など死ぬばかり思ふ心ぞ

靜の放樂

哀別離苦の情のいたく心を惱ますものにして殆んど、斷腸
 の思ひを爲さしむ、昔し義經の妾靜が放樂の歌能く之を現
 せり、

「ありのすさみの、にくきだにありきのあとのこひしきに
 わかではなれしおもかげを、いつの世にかわするべき、
 わかれのことに、かなしきの、親のわかれ、子の別れ、すぐれ

てげに、かなしき、夫妻の別れなりけり」

實に見る事も逢ふ事も今より後の如何ならんと思ふとき
の其の戀しさ最も強きものなり、

あふ事のもはら絶ぬる時にこそ

人の戀しきことも知りけり

悔戀

契戀

尋戀

其他悔戀いにしへの倭文のをだまきくりかへし昔を今よ
なすよしもがなあり、契戀「朝ゆふのこどくさよ、はねをなら
べえだをかをさむと、ちぎらせ給ひしに、かないざりける命
のはをぞ、つさせすうらめしき」(源氏物語、桐壺)あり、尋戀「秋の
ゆふべのまして、心のいとまなくのみ、おぼしみだるゝひと
の御あたりには、心をかけて、あながちなるゆかりも、たづねま
はしき心も、まさり給ふなるべし」(同書、若紫)又朝、夕、春、夏、秋、冬

の戀わりと云ふものあれども之れ等の戀の種類にあらず、
朝の感夕の感の戀のみにあらず、故に爰に論ふを止む、左
に少しく表出の事を論じて止まん、

精神の感動
と容貌

精神中に感動することあれば其の感動の動神経を傳へ
其れより筋肉の收縮を惹き起して外面に現るゝものなり、
其の現れたるものを表出すと云ふ、余輩不肖にして戀と
云ふものと思ひならひたる覺えなければ従て戀愛する人
の冷淡なるときは如何なる顔色を爲すや、強烈なるときは
眼及び口元の運動如何なるやを實見せず、故に余輩の實
験を述ぶよ由なし唯二三先輩の云ふ處を記するのみ、

表出

表出の事よ就ては通常人々の云ふ處なれども一定の科
學的説明に至ては少數の人のみ之を知る、精神の活動する

大ニ
著
者
の
見
解

こと激しきとき、眼をして上へ向ひしむ、俗に之れを威ありて猛き相なりと云ふ、又謙遜なる人の自然眼の下に向く、俗に之を優さしき相なりと云ふ、時に又淫慾の強き人と云ふことあり、要するに戀愛上は於て愛嬌の有無を容貌より定むること容易ならず、何となれば惚れた女なれば「アバタ」も「笑靨」も見ゆるものなればなり、ダーウ井ン氏論じて云へり、「戀愛する人の相逢ふとき、彼等の心臓の急激な鼓動し、呼吸の甚だ促進し、而して彼等の顔色の紅葉を呈するなり、その男女両性の戀愛の母親の子供に對する如く「靜穩」のものにあらぬ故なり」と、又曰く「戀慕することの最も快き感情なる事決して疑ふ可くもあらず、されば一般に平和の微笑を呈し、眼の清らかに涼しくなるなり、又可愛の人と相觸

ダーウ井ン氏の説明

れ合ふ事、最も強き慾望の如く思はる」と、然り而して戀愛の強き時の婚姻前なるや婚姻後なるやを問ふものあらば余は「はれてねる夜のひとよさよりも通ふ一と夜がなづかし」顔見たく見られて見たし御忌まうでの句を以て婚姻前を説かんとす、換言すれば婚姻の前後は於て大に其の趣きを異にするなり、婚姻前に於ては互に心を置く所あるも故に悪しき事も善く見え少しの善き事も著しく見ゆるものなれば幾分の粧飾する處其の間はありて純然たる強烈な非ず、故に婚姻後となりて互の心底を互に見破りたる感きにて全く意氣投すれば戀愛も從て深く少しく忌みを感じる處あるときは琴瑟和樂すること能はざる其の強烈な婚姻後あり之れ別問題なれば暫く措きて余輩の少しく接

接吻

吻に就て論せん、

九十四

男女相愛するときの決して情交戀愛のみよ止まるもの
 非ず如何なる政治家も學者も王公も貴人も情交戀愛の
 反面の必ず其の基本となりたる肉欲上の關係あるなり、此
 肉欲に關するものは再生力の作用を爲す、之を爲すの源因
 の本能的にして種々の刺激より發達し來れるものなり、其
 の中よりありて最も近因となるもの蓋し接吻なるべし、
 一ウヰン氏論じて云へり「我々歐洲人の戀慕の記號として
 接吻することを爲すなり此事人間固有の如く思ふものあ
 るも決してさる理なし」と、而して「フィシアン」族、ニューゼー
 ランドオウストリヤ亞弗利加の一族及び「エスキモ」族其他
 三四の人種國土に於て接吻することなきを証せり、然れど

グーウヰンの接吻論

相觸の快樂

も又曰く「可愛の人と相觸るゝ事の實は快樂なるの人間の
 固有にして又自然的なる事明かなり、此相觸るゝ事の各國
 に行はるゝが如し、ニューゼーランド又ラフランカーの
 人の敢て接吻せざるも尚ほ鼻と鼻、胸と胸、腕と腕、腹部と腹
 部を相磨することを欲するなり、又手杯を以て顔を撫でら
 るゝをこよなき快樂と思ふことあり」と、されば接吻するこ
 と又の身體の部分を相觸れしむることの人間の固有性な
 りと云ふも不可なからん、之れ亦戀愛の身體上より現れるゝ
 表出なり社會の事物も相觸るゝ事なくんば絶滅せん、

涙液

終り論すべきの涙の事なり、涙の失望、悲哀、憂愁、苦心、落
 膽、不如意の極に於て流れ出づ、之に反して喜悅の極にも流
 るゝ事なきに非ず、小説家詩人の愛情を表はす段又は悲哀

九十五

の段必ず涙を記さるるなし、涙の國の爲め家の爲め君の爲め流すことあり、然れども國の爲め家の爲め君の爲め涙を流すも毫も譲らざる否な之れより強度なるものは戀する人の涙なり、俗に人の顔色青白なれば病氣なるか、悲哀なるかを問ふ、之と同じく精神の窓なる眼の運動の大に人の注意を惹くものなり、故に一旦涙痕の濕ふるを見れば先づ其の何が故なるを問ふなり、唐人の詩及び紫式部の言を以て例せん

其の例

「美人捲珠簾、深夜嚙蛾眉、但見淚痕濕、不知心恨誰、」

(唐詩選)

「御手をとらへてあないみと、心うさめを見せ給ふかなとて、ものもきこえ給はずなき給へば、けいけいとわづらは

しくはづかしげなる御まみを、いとたゆげも見あげて、うちまもり聞え給ふに、泪のこぼるゝさまを見給ふい、いかい衾のあさうらん」

(源氏物語 葵)

「うちすて給へる恨のやるかたなきに、面影そひてわすれがたきよ、たけきことゝは、たいなみだにしすめり」

(源氏物語 明石)

其他いとしくはるさめと見ゆるまで、軒のしづくにことならずぬらしそへ給ふ(柏木)「しのび給へど、はるくどこぼれぬ」と、喜怒哀樂の色も現はれざるもなし、涙も亦一の表出なり、佳人の心乱れて絲の如く千愁萬恨交々起り盤根錯節を両断するも由なきときの涙は忠君愛國の熱涙と其の價值を同ふせざるも尙其の熱愛の情感に至て殆んど相伯

伸するの観あり、最後も一言すべきものは微笑なり、微笑の「ほゝえむ」にて精神の快樂なるときも現はるものなり、未だ喜ばし事と逢ふて怒れる人あるを聞かず、而して微笑の多く現はるゝ時は戀人と互に顔見するるときもあるべし、微笑亦是れ一の表出なり、余輩は之れより戀愛の天然及び社會の境遇に依て變化することを述べん、

第五章 戀愛と天然及び社會の境遇

天然及社會の制裁影響

社會に自覺生じてより人の社會的動物となれり、故に個人の思想行為の社會の制裁、影響を受け併せて天然の勢力の支配を受くるものなり、戀愛上も於ても亦然らざるを得ず、抑も戀愛の目的即ち天職とする所は既に述べたる如く主觀的として正當に再生力の作用を遂げ凡て憂愁を去て愉悅を興へ客觀的として常に温雅柔和の性質を以て社交上の運動に浸入し乾燥なる所に雨露を興へ炎熱なる所に涼風を吹き送る如く社交全般の調和を爲さしむるものなり、されば戀愛の清潔に且美妙に運動することは國家の爲め望まじきことなり、雖も天然の家族的、社會的、政治的併せて宗教的勢力に影響せらるゝものなれば各個人

各種族の境遇の如何も由て其の戀愛する方法手段及び其の情狀に異なるを致すなり、此變遷を説明するに種々の方法あり、而して之を歴史的に研究したるものも湖處子宮崎氏あり、今氏の著なる「日本情交の變遷」より拔萃して中古以來情交變遷の大畧を示さんとす、但し氏及び世上の所謂情交の余輩の戀愛も相當るものなり、

中世王朝より源平氏の

「第一、中世王朝ヨリ源平氏ノ交ハ是レ自由情交ノ時期ニシテ風流處士女ハ歌章形管ヲ以テ情交ノ器具トナシ歌會佳節ヲ以テ今日ノ俱樂部トナシ才俊相慕ヒテ絶美ノ譚柄ヲ後世ニ傳ヘタリ且ツ所謂歌章ハ今人ノ漢土詩文ヲ作ルガ如キニ非ズシテ只當時ノ言語ニ少シク句調ヲ整ヘタルモノナレバ管ニ殿上ノ雲客京華ノ都人ノミナ

源氏以後足利氏の中世迄

ラズ一般ニ此風尙ノ行ハレタルコト泰西今日ノ状態ト相似タリ當時亦白拍子ナル者アリテ族制ヲ破壊シテ情交ノ摸規ヲ擴メタリ、第二、源氏以後足利氏ノ中世迄ハ正ニ自由情交ト干涉情交ノ相争フノ時期ナリ歌章ハ情交ニ器具タラスノ單ニ心識上ノ風流トナリ武夫ハ一半情人一半軍人トナリ女子モ亦能ク時勢ノ變遷ヲ察シ情交ノ状態ヲ一變シ其心相ヲ鼓舞シテ丈夫ノ舉動ヲ爲シ俊才ノ意中ニ當ント欲シ悉ク異時婉雅優容ノ態ヲ脱却セリ獨リ後房ノ宮女ノミ尙舊容ヲ存スレド時勢ニ適セザルヲ以テ斥ケラレ適々良運ニ際會スルモ其良人ヲシテ其氣ヲ消耗セシムルノ傾向アリ又武士及ビ武家ノ女子ト雖トモ或ハ武備ニ長セザル者アラン或ハ干戈ヲ執ル

應仁乱後豊臣氏の末路迄

ニ適セザルモノアラソ是ニ於テカ媒介者ナル者アリテ
 各々其配偶ヲ得セシム此ノ如キ者ハ自由主義ト干涉主
 義ト相争フノ状態ナリ、第三、應仁乱後豊臣氏ノ末路迄ハ
 情交ナルモノアルナク只是レ暴力ノ拘盜威逼ノミナ
 リ亡國亡家ノ飄流女子ハ或ハ勝者ノ爲メニ強奪セラレ
 或ハ敵國ニ質家シ或ハ山海狗盜ニ脅迫セラレ血飲嗚咽
 ノ間ニ繫留セラル今日ノ花巷娼樓ハ遠ク此時代ニ起因
 スルモノ、如シ且ツ此時期ニハ優勝劣敗主義獨リ郡國
 ヲ争フ者ノ間ニ行ハル、ノミナラズ山野ノ民間亦野武
 士任侠ナル者アリテ強談強力ヲ以テ良民ノ妻孥ヲ奪ヘ
 リ今日結婚上幾多ノ腕力主義尙存セルハ疑モナク當時
 ノ遺風ナリ、第四、徳川氏ヨリ維新前迄ハ純然タル女子器

徳川氏ヨリ維新前迄

物ノ慣例ヲ以テ封建制度ヲ確立シ之ヲ助クルニ頑固ナ
 ル儒佛ヲ以テシ男女ノ間ヲ全ク隔絶シ陽々相戀ノ醜風
 ナ以テ之ニ代ヘタリ女子ハ只繼嗣ヲ舉ケ得ルノ一事ア
 ルヲ以テ絶ヘサルコト縷ノ如キ運命ヲ今日ニ傳フルヲ
 得タリ而シテ女子ノ此憐ムベキ境遇ニ陥リタルハ獨リ
 封建ト佛儒教ノ罪ノミナラズ女子自身亦與リテ其責ヲ
 分タザル可カラズ何則南北朝後戦争ノ時代ニ當テハ武
 家ノ女子能ク時機ニ投シテ干戈ヲ振ヒ大ニ男子ノ尊敬
 ヲ受タルヲ以テ當時ノ女子ニ限リ此ノ活潑事業ノ能ハ
 サル理由ナシ其証ハ當時ノ復仇美譚半ハ女流ノ名譽ヲ
 傳フルヲ以テ知ルベケレバナリ、第五、現時ノ女子ハ處女
 ノ時ニハ父母ノ衣裳器玩ノ如ク幽閉ノ中ニ在リテ隨意

現時の有様

ニ戸外ニ出ル能ハズ將來ノ運命自家之ヲ擇フ能ハス其
 教育ハ小學ノ中途ニ止リ其心術貞操ハ厭フベキ清元常
 盤津等ニ由テ影響セラレ一時ノ情ニ迫リテ云フニ忍ビ
 サル汚徳ヲ犯ス歸嫁ノ時節ニ至リテハ男子婚姻上ノ主
 權ヲ有シ己レ之ヲ否トスルモ承諾セザル可カラス己レ
 之ヲ可トスルモ他ヲ強フル能ハズ既ニ合誓ノ式ヲ舉ケ
 テハ種々ノ波浪ニ搖カサレテ離婚トナル而シテ其離婚
 ニ關シテハ法庭ノ判決ニ由ルニ非ズ只家風ニ合サルノ
 一言ニ添フルニ三行半ノ去狀ヲ以テシ殆ント道路ノ人
 相遇フテ亦相離ル、ガ如シ云々」

日本史上を通覽するときの右の所説大に當れるが如し、之
 れ余輩の意を得たるものなるが故に暫く借りて自らの説

に代ゆる所以なり、坪内逍遙君亦正論なりと評せり、然りと
 雖も其の實相を解得せんには單に歴史的に止まらず萬國
 比較的、心理學、社會學的の眼光を以て研究せざる可からず、
 之れ今日容易に爲し得べきことに非ず、さりとて日本特關
 の變遷を以て尙全般を推度することは甚た誤れるものな
 れば茲よと日本のみの情交變遷を大畧批評的に論究して
 止まん

精神及び社
 會の波行的
 運動

吾人の精神の常と同一轍と止りて同一物のみを始終見
 聞するを忌むものなり、心理學者の精神の活動は波行的運
 動ありと云ひ、社會學者の社會の活動に波行的運動ありと
 云ひ、物理學者星學者の物質の小分子運動も、天体の運動
 も、猶は波行的運動ありと云ふの抜く可らざる眞理なり、

余輩亦常に之を信ず、夫の中世王朝より源平氏の交り自由情交の風ありて當時は戀愛の一事を以て通常の事となすのみならず却て誇耀すべきものとなすに至りしは何の故なるか、個人は社會を動うすの自動力あるも又社會の爲めよ動かさるゝの受動的動物なり、而して社會の運動するは、必至の理由あるものにして一として偶發のものあるなし、其靜動皆理あり因あり、彼の藤原氏の多くの詩歌の贈答管絃の唱和をいと面白げに事とし美味を食ひ佳人を集て或は歌ひ或は舞ひ男女間の情交自由となり從て放逸に流れ云ふに忍びざる事ども多く行はれたるは天慶の乱後殆ど九十年さしたる大亂なく所謂泰平無事の世なり、けれバ益遊情奢侈に流れたるに由らずんばあらず、小人閑居して不

藤原氏の代

平氏の代

善を爲す」とは此謂なり、されば源平の時に至ても教化壞亂して風俗頹敗し百有餘年の因襲せる弊風は依然改まらざりしなり、見よ平氏の政權を得てより以來太平に慣れ從て風流に耽り春花秋月を友とし詩歌管絃と事とし其の風情殆んど藤原氏と同一流の現象を呈せり、故に文學の如きも文章の婉麗なるのみにして活潑の精神に乏し、彼の伊勢物語、竹取物語、土佐日記、住吉物語、須麻記、宇津保物語、大和物語の類出て和歌よては古今和歌集、萬葉集鈔、新撰和歌集の類出て之に次て落久保物語、濱松中納言物語、源氏物語、紫式部日記、狭衣物語、和泉式部日記、榮花物語、枕草子の如き書類は皆な春の長閑なるに情緒の濃かなるを致し、秋山落葉の景を見、鳴く鹿の聲を聞て物の憐れを歎じたる少年佳人の風情を寫

當時の文學
の骨子及び
其の書類

したるものに外ならず、此時代の文學の骨子、實に戀愛にありと云ふも過言に非ざるべし、斯の如くなるが故に平氏の滅亡せるも是非なきとなり、花の朝月の夕に婉々軟々として柔弱の空中に心醉せるもの、結果さありてこそ至理なり、夫れ戀愛と柔軟の性なり、温雅の質なり、優美の情なり、藤原氏平氏の如き、殆んど絶對的の柔軟温雅に陥りたる有様にて之れに相對する勇猛剛毅の精神少なかりしなり、藤原氏の政權を擅にさるゝ仁明文徳の良房に始まると雖も其來る處を探くるときは其祖鎌足の天智を輔佐して蘇我氏を滅し其子不比等の持統より元正に至るの四朝に歴史以來勢力相積んで稍大なるを致せるなり、此時既に奢侈の風ありしが寛平延喜の後に至ては亦甚だしき者あり、

藤原氏平氏の情交共に中府を得ず

寛平延喜後の風俗

嵯峨梅菴君善く之を叙せり、世の泰平につれて九重の内より月卿雲客の家に至るまで風流奢侈の事漸く行はれ梅花、蓮葉、萩花、菊花、曲水などの宴も盛んに貝覆、貝合、根貝、艶詞合等の歌合も起り樂には神樂、催馬樂、散樂等あり歌ものにと今様、風俗、郢曲等あり、其他蹴鞠、打球、象棋、圍碁、雙六、投壺等より以て物マテ、聲ワザ、骨ワザ、力ワザ等に至るまで遊興逸樂に屬する者之殆んどあらざるなし（當時貴族高門の外出するには多くの代車、牛車、馬車等の數種あり）男女の交際も自ら親密にして佳人淑女は嬰庭に列して歌舞することあり歌會に出て歌合することありて此の如きの事常に絶えざりき、又曰く、斯かる風流奢侈の結果として風俗も痛く亂れ慇懃を宮女に通する都ひ男あり同時に二夫に見わたる雅ひ女あり婚姻するにも昔し

當時の男女交際

媒人を立て父母の許を得て爲すものなりしが此頃は多くの媒妁にも籍らず父母の許をも待たず唯互に詩歌の類にて消息するなり、この頃の歌集ともに戀歌の多きも主として此に由りしと云へり且つ此頃の風として男子の大方家に娶らずして女子の家に通ひ往くことなりき斯く閩門修まらざるに於ては遊女など多く出て来て河内國江口、攝津國神崎蟹島などの河邊に門戸を比べて居り旅行の人を見るときは紅粉を粧ひ綺羅を飾り扁舟に乗て旅舶に來り或は歌舞し或は枕席を薦め上は卿相より下の黎庶に至るまで接らざるなし、之を愛しては妻妾とするものあり斯る次第なればいつとなく百姓帶刀の禁も弛み惡徒刀を帶いて郷里に横行するものあり、余輩茲に於て長大息せずんばあ

遊女の起原

戀愛は相對的なり

らず、戀愛は相對的のものなり、然るに藤原氏平氏の如きは殆んど絶對的に陥らんとせり、一個人に於ても光源氏の如く業平朝臣の如く單に柔軟的人物となるに大に難すべきなり、宜しく相對し相和する所の勉強活潑剛毅の氣象を有せざる可らず、兩者並行して中庸を得るは天理よして榮ひを爲し偏僻するときは倒滅するを免れず、然れとも習ひ性となるものなれば不偏不黨に直立するに甚だ容易ならざるなり、實に人生界には柔弱の剛強に勝つあり剛強の柔弱に勝つあるは唯是原動反動の因果にて波行的運動の一部と云ふべし之れより少しく其反動を述べん

反動の勢力

平氏滅びて後頼朝府を相州鎌倉に開き幕政を始めしより武門政府(武備体)の形休茲に堅固となり朝廷の權愈衰

北條氏の代

へたり、然れども北條時政の奸計と實朝の優柔不斷は頼朝の紀を絶ちて北條氏とならしめたり、之れより承久の乱起りて争擾し泰時の治國ありと雖も朝廷の關東を圖るの欲慮と高時の驕傲、奢侈、官吏の奸佞なるありて衆情日々に離散せり、茲よ於て俄然として勤王を唱へたる楠氏、之よ同伴する新田、足利、赤松等の爲めよ北條氏の滅亡されたり、夫れより尊氏義貞の軋轢激發し南北朝の争乱止んで足利氏の代となりて、万事紛々雜々を極め直義の尊氏其子義詮と隙を生じて終に父子兄弟の戦起り時氏桃井直常等の足利直冬を將として尊氏義詮と又父子兄弟の争起り、尊氏の初め兵を擧げしより以來殆んど二十年間一日も干戈動かざるの日なく本邦古今戦争中の最も複雑したる戦争を起し

足利氏の代

文學の極衰
と尙武の極盛

たる時代なり、夫より織田豊臣となりて遂に徳川の一統に歸したり、先きに鎌倉の世なりしときは文學の徒未だ全く其の跡を絶つに至らざりしが降りて南北統を争ひ干戈相競ふこと五十六年に至り兩朝合して未だ須くもわらざるに應仁の乱あり、斯かるるときよしわれバ一も文學を云ふ者なく従て一大衰弱を來せり、之よ連れて風俗も大に變遷し髮風にも武勇の粧をなし食物も尙武の風あり、戀愛上男女の情交亦如何んぞ變遷せざることをあらんや、宮崎君の言を以て云へば當時の「形管を執るの手を以て弓槍を揮ひ佳人を得んと欲する所以は強敵を挫折するの思慮に變じ絶妙巧辭の胸襟は策を帷幕よ運らすの淵藪となり茲に封建制度の樹立を致し夫人處女と雖も馬に鞭ち敵を馘るの勇

戀愛上の變化

氣なき者の墮て閑室の裝飾品となるゝ至れり、夫の戀歌の科目歌合會の如き今日尙其形迹を存すと雖ども唯之れ昔時の殘聲餘影を見るのみ其真趣ゝ至ての既已に乾涸して一風韻を認めざりしなり、婦女子も惋々愁容を帯びて別れに臨んで袖を濕し或は斷腸の餘り水ゝ投し又は尼となるの習慣を破り良人と別るゝことあるも其兒を護して志を繼がしめんとするの風あるに至れり、

世の諺に英雄は色を好むと云ふことあり、然れども色を好むもの必ずしも英雄に非ず、色好まざらんもの必ずしも小人に非るなり、然り而して世上の英雄多く色を好むと抑も何ぞや、人或は云ふ情交と武骨は氷炭相容れずと、然れども世上の武骨者の色を好むなり、余輩試みに其の理を説

英雄色を好むの理及び戀争時代の

明せん、夫れ人心の柔軟温雅にのみ沈むは不理なり、又勇猛武骨のみ陥るも不理にして共に偏僻の極なり、見よ中古の柔軟的風流奢侈は反動して武斷勇猛的戰亂となりたり、然りと雖も戰爭は極致の處に非ず、戰爭するは快樂を得んが爲め苦痛を逃れん爲なり、然らば爭亂の熱ゝ蒸さるゝのときの快樂あるや、曰く否な、風流奢侈ゝ耽るの暇まなく、妻子と相團樂するの折なく、詩歌管絃を事とするの閑日なし、實に戰爭中の快樂は城を破り家を焼き首級を積むにあるなるべしと雖も之れ快樂の最大要素となるものに非ず、茲に於て婦女の掠奪起り、仇家の質、始まり、強者の之を取り弱者之を奪はれ、腕臂の力は則ち婦人を得るの手段となるなり、此事たる決して野蠻極まる國に存するのみならず半開

陽々相偶の起因

（男と女の耻る事に關し）
シセロ曰く
「ダイシアル
コスハブレ
ト此罪を
犯したり
非難したり
實に相違な
かりに多事
思はるべし
曰く「此淫
事ハ盛にギ
ハシナシ
傑學士英
皆之を犯
す却て榮
さしたる
思はるべし
に様

少年を愛する陽々相偶の醜風所謂男色なるもの盛んになれり、斯く男女自然の優美なる情愛を等閑にして男々的に移りしは士氣柔弱になるどの迷信と肉欲の堪へ難きより起りしものなり、今日も於ても鎮西地方東京懶惰書生社會、又陸奥の地方も現出し居るは怪と云ふべし、彼等自然を棄て、士氣を保護せんとし肉欲も堪へずして非理に陥り身體を害し心氣を勞し以て剛膽なりと稱するは禽獸も均き鼠輩なり、斯の如き非理よりして男尊女卑の弊風を來せり、封建政度儒教佛教の實に男尊女卑の形体を堅固ならしめたるものなり、然れども今日の舊信去つて新信の輸入せられつゝあり且つ女子の教育歩を進め教育の道宜しきを得たらんは男女共自然の權利を保つこと遠きにあらざ

るべし、

古のソドム
の罪に依りて
亡されたり
と耶蘇教に
て教ゆるる
り）
全般の批評

余輩ハ斯の如く見來れば無事の世は戀愛自由となり、國家の興廢も影響をすることあるを知る、そは戀愛の自由極まる處は風流奢侈あり放逸放惰必ず従ふものなればなり、故に藤原氏平氏の如き社會ハ望ましからず、之れ柔弱の剛強も勝ちたる時代なり、然り而して戦争交々發起するどきハ剛強の柔弱に勝ちたるにて殺伐の風色天も満ち肉欲も堪へずて婦女を掠奪し之を辱かしめ以て英雄色を好むの評を受くるの時代の人生究竟の目的たる幸福なし換言すれば幸福を發生せるの快樂なし、之れ又吾人の望むべき社會も非ず封建時代の壓抑主義男色主義の禽獸となりて始めて行ふべきのみ、之を以て戀愛ハ社會的政治的境遇

の影響を受くることを知るべし、尙ほ左より天然的影響を述べん

社會上に於ける天然的影響

夫れ有機無機の外勢の各地到る所に種々の状を呈するが故に海岸には漁獵、航海、造船、製鹽等の業起り山間又は盤石を切出し鑛物を採掘し或は養蠶すること等起り水力の便ある所は製造所起る、即ち各地方の其の遭遇する外勢の爲めに各異の産業を生出するなり、スペイン云く産業機關の全部の職能と構造との職人と相觸るゝ所の鑛物植物及び動物の如何に由て定まり又産業機關の各部異別の職掌は其の部の取扱ふ所の有機無機の地方産物の何如に依て定まるものなりと、然り而して外界境遇に由て産業を異にするは其の實社會の形體を異にし、思想行為、經驗、感情に

氣候上の要

異を生ずると云ふは異ならず、氣候上より社會の發生進化を察し其人民の精神界を見るに寒國は食物少なく防寒の爲めは心身を勞して子孫繁殖せずソクラテル、フェゴ、南亞米利加の南端、エスキモ人の如し、思ふに人類の活動に要する丈の温度を得難き場合も於ては社會は發達せず、之も反して極熱帶地は一時非常の假進歩ありと雖も社會は永續すること能はず、要するに社會の生活の寒熱の經界内に限らるゝものなり、故に温帶地方は社會繁榮のある所なり、又乾燥せる地方の人の概して活潑なれども滋濕せる地方の人の柔弱なり、前者は智識發達し後者は發達せず、前者は社會の發生を助け後者は之を妨くるなり、又地形上より見るときは地面の繁雜無雜に由て大に進歩の度を異にする

地形上の要

なり、それは同一様の表面なれば無機有機の物材少数なるにて物材の種類少数なれば貿易物産隆盛なるを得ず従て社會發達するの理なし、是れ習慣も經驗も同一様にして智識藝術進歩することなきよ由る、例へば亞細亞の中部亞弗利加の中部の如し、又ナイル川邊ギリシヤの如きの比較的又瘠雜せる地方なり、要するに敵なき國の孤獨的なれば發達を妨ぐるなり、敵ありて之と生存競争し後ち漸々發達するなり、貿易上に於ても供給するのみよして需要なくんば産業の發達なきが如し、又植物動物上より見るときは植物缺乏せる地方は社會の發達を妨くと雖も過多なる地方の同じく之を妨ぐるなり、家屋什器多くの木を以て造るものなるが植物の缺乏せる地方の之を爲し能はざるが故に智識

植物動物上の要素

天然の境遇
と人爲的淘汰

も従て發達せず、動物に於ても有用なるもの多數なれば貿易上衣服上食物上又利益ありと雖も亞弗利加の如き毒蟲猛獸のある所は決して社會の進歩を爲さしむるものに非ず、エマールソンの「降雪ある所は一般に庶民の自由あり高尙の文明體は熱帶地を好まず」と云へるは一定不變の規定に非ること素より明くなり、雖も尙は空言に非るなり、右に述べたるは天然の境遇よ由て社會の影響せらるゝことなるが如何も人智發達して巧妙なる人爲淘汰を用ゆるも寒暖温熱其他の天然の勢力の支配を免るゝこと能はざるや明かなり、然りと雖も天然の勢力に服従して境遇を代へ順應の宜きを得ば如何なる民族も恐く發達せざるの理なかるべきか、

以上陳述せる所を以て既に人間の思想行為習慣感情に異なるを致すと必然なる理ありて然るを知る余輩と右の道理を應用して戀愛情交上は變化を來す事を少しく述べん

房州海岸漁父の生活

余曾て房州海岸に遊び殆んど二ヶ月を送り稍當地一般の景況を見聞し得たり世人の知る如く漁父なるものと朝早く衾を離れて沖に漕ぎ出て多くは夕暮に歸宅するものなれど或時の船中に夢を結ぶこと少しとせず是等の人々の苦樂の情況果して如何彼等の終日漁獵するの一の職務にして多數の漁獵あるときの手の舞ひ足の踏む所を知らざるの喜樂あるべし其の獲たる魚を賣捌きて代金を受取り妻子の前は並ぶる時は非常の快樂なるべし然れども之

酒色に耽り貯蓄の精神由は乏しき理

れ職業上の快樂にして心身全體を満足せしむるもの非ず況んや漁獵少なくて金錢を得ること稀なるときは必ず其の苦痛を洩すの機を得んとするや必然なり然り彼等の酒色は耽ること甚しく金錢を貯蓄するの精神薄き何ぞや是れ職業上の關係より將來の幸福を願みざると金錢の一部の満足を興ふるのみにして全體を満足せしむるの力なきより來れるなり故に其地の比較的藝娼妓の數多く言語動作共は野鄙にして中より大坂を以て日本より廣しと思ふものありし又唐國の日本の一小部内もあるものなるべしと思ふものさへありし風俗甚だ乱れて日中裸體にて通行する杯彼等の良心より一の呵責なきが如しされは戀愛情交の清潔を保たんと到底覺束なく見ゆるなり

其故の彼等も教育の光薄く渡り波風荒き沖邊も消光するものなれば勢ひ肉欲フック、グロウ、ボクシ即ち人生上最も偉大の勢力ある處の迷ひ易き色欲も耽るの當然の事なるが如し、東京を去る僅かよ二十八九里なりと雖も其の天然的地形より産業より社會的境遇より種々の變化あること驚くべし、良心の頌揚阿責善惡の標準、美醜の趣味嗜好、苦樂の點、人智發達の度よ於て試みよ彼等漁父等と東京の中等社會を比較せば恐らく百驚を喫せざるべし、其の政治上より教育上の觀念よ至ての彼等の殆んど皆無の境よあるなり、

雪積もる山
里の農夫

又た雪積もる山里よ住居するもの多くの農夫なり、彼等の雪消てより雪降る時迄終日終夜忙しく雪降りて雪の消ゆる時迄は左程に忙がしからず、その山野森林に労働す

ること叶はされば皆家よありて夏の豫備を爲すのみ、夫れ夏秋の間と終日労働して尙ほ其の不足を感ず敢て戀愛情交の美を望むの暇なし従て再生的に重きを置き單に肉体的に傾くなり猶ほ源氏以來徳川氏迄の如し、冬春の間は終日終夜労働するの必要なし、之れを以て所々よ曖昧なる料理店牛肉店等産出し農家の少年子女相往來し又炬燵の邊、歌かるたの遊戯盛んに所謂情交の自由なるもの幾分か存するも雖も無教育者は之れが爲めに淫猥に傾くなり實よ冬春の間は妓樓も繁榮を極むるなり、概して閑居なる人の淫欲も傾くことは普通なりとせ、若し夫れ單よ漁獵よ刈獲よ忙がしき漁父農夫の然ることあるも他よ於て然らずと云ものあらば之れ精神活動の法を知らざるものなり、以

上の所説に由て戀愛情交上より天然の社會的境遇の大に關係せるものあるを知るべし、

今日は廢娼論の聲諸所に起り其の運動活潑なる時なり、余輩亦廢娼するを望む、娼妓は關しては後日に於て論述し茲には娼妓の起因を就て少しく考察し以て本章の論を結ばん

娼妓の起因

我邦に娼妓の現出せるは第一、遠征戰陣に倦めるもの、爲めに一夜の款を得せしめんとしたる金儲主義より第二、閨門の乱れ、情交自由の結果として生ず、之より慰みの趣味野卑に至り以て遊女を生じたり、而して其の時に於て社會の良心之を呵責したらんには今日の如く多數ならざりしならん、然れども多數の藝娼妓を現出し併せて男色女色

藝娼妓繁昌の理由

より私娼等の跋扈する所謂姦淫の空氣上下貴賤を通過して蔓衍したるに必ず其の理ありて然るものならざるを得ず、其原因を詳論するは本章の目的に非ず故に一言を以て之を云へば日本人一般に快樂の要素少數なるより來れり、と斷言せんのみ、男女の適宜の交際は人生快樂中の一大要素と爲すものなり、此交際にして當を得ず加之封建の下より維新後に於ても義と云ひ正と云ひ男女の相近かざる如きを云ふものと誤認したりしうば常に勃興的勢力ある戀情、他の方向を取りて發起し以て姦淫の淵に沈みいなり、故に實地上廢娼を希ひ且つ一般秘密的姦淫の風を矯正せんよは廢娼を唱へて社會良心に訴ふると同時に日本人に快樂の多數の要素を與ふるの工夫を爲さざるべからず、即

廢娼の順序

ち快樂を惹く所の多數の要素を造るゝ若かず之を爲さん
 には正當なる教育を普及して物質的勢力を利用し精神的
 能力を開發し特に整然として大量的なる理性を發達せし
 め同時に徳義の觀念を強くし社會の良心を鋭敏にし各人
 の國家社會の幸福を得る爲め倫理を行ひ文學上は宜
 しく清純偉大勇壯靈活美妙高潔温雅の分子を注入して淫
 猥邪曲姦佞の分子を除去すべし斯くして以て快樂の要素
 を多數ならしめざる可からず世上快樂の要素多からざる
 ゝ非ず之れを多しとするの活眼者にして之れを少しとし
 て得能はざるもの無教育者なり故に無教育者の單に淫
 欲に陥るは勢の然らしむる所と云はざるを得ず天下憂ふ
 べきもの少しとせず然れども世上無教育者の多數なるこ

教育あるも
 の快樂は
 其範圍廣大
 なり

とより憂ふべきもの少なるべし教育ある人の眼光は
 萬事萬端の因果を悟るの能力あり森羅萬象の美麗壯大奧
 妙を探るの勢力あるなり、

「天地有所樂、碧雲吹裂金鳥躍、亂峯飛舞海濤呼、萬松奏樂響
 洞壑、天地有所悲、黃沙慘澹商颿吹、斜陽蔓草迷秋蝶、古月空
 林泣子規、天地有所哭、春雨瀟々暮江竹、天何所歌、急霰打節
 雷鳴鑼、天地醉時花作臉、天地怒時霜作臉、君不見天地有時
 幾變更、苦樂不異世人情、江河亦應一朝涸、日月何必終古明、
 嗚呼日月長難照、古鬼誰復弔、問天不答地無聲、以痛哭大人
 笑」

(天地行)

斯の如き詩人の漫言の如しと雖ども快樂を得るの一大
 要素たるなり、教育あるもの、快樂の決して窮窟なること

なく且つ其の要素多數なりとす、多數の快樂の要素を造る、
 こゝは是れ教育の要なり、夫れ社會の盛衰興亡進化退化皆な
 是れ人心の作用なり、而して其の人心の作用は天然の影
 響を免れざるものなり、換言すれば社會の現象とい精神力
 と天然力との合したるもの即ち吾人の慾望より外物を順
 應せしめん爲め勞働製作したるもの是れなり、又社會の事
 物は彈力質を有し必ず反動するものなり、或は柔弱となり、
 或は尙武となり或は剛強となり或は淫思とあるなり、ゼリ
 フイ云へり、社會の文明とい人類の行動力反動力一名靜狀
 力活動力猶ほ他の語を以て云はゞ徳力智力の相平均して
 毫も偏輕偏重なきにありと、而して戀愛の現象と行動力な
 り一名靜狀力なり他語にて云はゞ即ち徳力に屬するもの

なり、一哲人云へり、戀愛は盲目的勢力なりと、されば之を指
 揮する理性を發達せしめざるべからず、又古今の小説家多
 くの戀愛上より徳義を説ける所以は是れ戀愛の道德上の
 一大要素たるを以てあり、又ワードの社會靜學部に戀愛上
 の關係を論述して社會動學部に理性上の關係を論述した
 る所以は戀愛の社會の改良進歩を指揮郷導し之を左右す
 るの勢力なるに非ずして再生力の關係快樂上の關係を有
 るが故なるべし之れ活動力も非ずして靜狀力と稱する所
 以なり、

第六章 戀愛と美貌及び美質

人は美麗を愛する動物なり

美麗の標準
更らにふし

人は美麗を愛する動物なり、天然の美、容貌の美、性質の美、皆な吾人に快樂を興ふるの要素なり、而して人間容貌の美麗の戀情を惹起するに與て力あるものなり、然れども古來未だ曾て美麗に對するの標準、又た趣味と稱すべきものは、氣候、性質、境遇の異なる所より、更らに一定せるものならず、頭髮、鼻髯、顔色等の愛好する所各種族に差異あるなり、或は紅色を好んで白色を忌み、或は無髯を愛して有髯を憎み、或は低鼻を嘉みして高鼻を納れざるものあり、左も幾多の事實を掲げ、併せて詩人小説家の美貌の説明を附し、以て各種族の美貌に對する嗜好の異なるを述べん、

亞米利加印度人の美貌

ハーチー氏の亞米利加印度人の中も多年の月日を送り

吾人

支那北方人の美貌

たる人なるが此種族の婦人に就て云へることあり、北方の印度人よ對つて美貌の婦人とい如何なる資格を具ふるものなるやを問はば、必ずや廣匾の顔、小サキ眼、高凸の臉骨、兩側の臉に横架されたる三條又は四條の黒線ありて低額、大潤の腮、鈎鼻、並ぶ黄褐色の皮膚なるものなりと答へんと、バラス氏は支那帝國の北方を旅行したるとき云へることあり、其邊の人々の廣顔、凸臉、過廣の鼻、過大の耳を具ふる婦人を尙ぶと、ポット氏の支那内部の人々の歐洲人の白色なる皮膚凸出したる鼻を見ると、とき大に恐るゝの色ありと云へり、ヒンレーン氏安南人に就て云へることあり、彼等の中にありては圓頭圓顔は最も貴重なるゝの資格なりと、又云へるに容貌全體の圓狀は婦人に於て最も重んぜらるゝ

安南人の美貌

シヤム人の
美貌

が故に婦人の美貌は圓狀の表はれたる度に比例して批判せらると、而してシヤム人は小鼻、廣口、厚唇、著大の顔、甚だ高く且つ廣き臉を具ふるものを尙ふなり、マンゴ、パーク氏の説に由れば或る黒奴は白色の皮膚高凸の鼻を見て最も卑醜の極にして法外なる形狀と思ふなり、又亞弗利加の或る黒奴は白色の皮膚を見るときは眉を皺そめて彼等は戰慄するなり、又東海岸の黒兒グバートン氏を見たる時に叫んで云へり、白人を見よ彼の白色の無尾猿の如く見えぬなりと、又西海岸の事よ就き井ンウッド、リイド氏云へることあり、黒奴は稍々白色のものよりも最も黒色のものを貴重して之を稱賛すと、是れ蓋し彼等の過半は魔神や幽靈を白色なりと思ひ且つ一般に不健康の記徴と考ふるより來れ

黒奴の美貌

るなり、ガルトン氏は南亞弗利加の土人に就て云へり、細長がに輕妙なる婦人は彼等の忌む所なりと、又南亞米利加邊にても歐洲の婦人を以て彼等の土民よりも賤しきものなりと思ふなり、

美貌に對する標準各種族に由て異なる

是に由て之を觀れば今日歐洲人の美婦と稱するものも黒奴に取りては醜婦なり、則ち美麗と稱する總念は彼此大に差あり、從て趣味、嗜好の異なるを見るなり、然れども白色を愛し有髻を好むを以て必ずしも開化せる人種と稱するを得ず、皮膚の色に對しては互に一致せざるも鼻口に關して一致することあるなり、之に反對せること又無しとせず、井ンウッド、リイド氏は亞弗利加の西海岸並びに歐洲人は少しも出逢ひしことなき其の内地の人々も美麗の觀念

に至ては全く我々と同一なりと論せり、博士ロルフも同説と示せり、又氏の本國の女子が美麗なりとして貴重するものは黒奴と一致し即ち歐洲婦人の美に對する品目と大に符合するものあるを論證せり、又氏は如何なる鼻は最も貴重さるゝやを疑ひたりしが偶々一婦人の呟きを聞けり、妾は彼と結婚するを好まずそは彼は鼻を持たぬ故ありと、此言は甚だ低き鼻梁の貴重されざるを證するものなり、氏又云へることあり、黒奴は我々の皮膚の色を好まず彼等は緑眼を嫌惡を而して彼等は我々の鼻は過長にして唇は過薄なりと考ふるなりと、

美貌も自然
淘汰の理に
支配せらるる

ハンボルトの云へる如く人は如何なる性質にても少しいわるものを貴重して之を大きくせんと試みるものなり、

例へは髯少あき人種は髯の根跡を抜き盡し又手足の毛をも刈り盡すとあり、思ふに頭蓋も昔時と今時とを比較せば大に差異あるを見る、アラカンの住民は廣く平らなる額を重んじ之れが爲めに彼等は新たに産れたる小供の頭を鉛板にて固むるなり、又ヒジ島の住民は廣くてし誠と圓き後腦蓋を以て大に美なりと思ひ之れが爲めに色々の方法を施すなり、又彼の支那上等社會の婦人等は足の小さきを貴重して之れが爲めに無理に扭歪するとあるを以て知るべし、

日本東髪沿
革一斑

以上はチャールレスダーウソンの人類成來論より抄譯せるものなり、以下日本史綱の著者嵯峨榊雷氏の日本人の髪風に就て記する所を抜萃して一例とすべし、

美豆良

「美豆良ハ上代ノ男裝ニシテ髪ヲ左右ヘ分テ結縮タルモノナリ女子ハ分ケ

振分髪も眉（此時髮會岐髻會岐ト云フコトヲナス會岐トハ切ルコトナリ髻殿來テツカギル過ぎぬ君ならすしてたれかなづべき伊勢物語）トモアリシト見えたり

化粧品

「當時婦人ハ髮ヲ潤スニハ油綿トテ綿ニ香油ヲ漬シ置テ之ヲ塗抹ス面ヲ粧フニハ白粉燕脂ナドアリテ白粉ハ顔ニ塗リ燕脂ハ頰ニ着ケリ又鐵漿ヲ以テ齒ヲ染ムルコトモ既ニ行ハレ齒子ニテ眉毛ヲ抜キ墨ヲ以テ眉ヲ畫クコトヲモ行ハレタリシト見えたり

鎌倉時代

月代

齒を染む

高眉

「鎌倉時代ハ合戰甚々多カリケレバ常ニ胃ヲ被リ逆上ノ氣味アルニ由リ之ヲ洩ラスガ爲メニ頭ハ上ヲ丸クツレリ之ヲ月代（月代のいてこしあさをたづぬればかまくら山のすそ野なりけり）ト云フ其形月ニ似タレバナリ公家衆ノ元服ハ髻ノ長クテ短クツメ紫ノ組緒ニテ之ヲ巻キ鐵漿ニテ齒ヲ黒ク染メ今迄有リ來ル眉毛ヲ剃チロシテ其眉毛ヨリモ上ノ方額ノ際ニ墨ヲ以テ丸ク兩方ニ眉ヲ付ク是ヲ高眉ト云フ

「男ノ頭ツキ髮狹クサカヤキ大ニ剃リ又若人ハ前髮薄ク殘シ中剃チシタリ何レモ額ハ角ヲ入レテ抜ク髻ハ腦後ニシテ曲チ丸ク束子タリ……女ハ上等ノ人ト見ユルガ髮ヲ深ソギシテ下ゲ髮ヲ衣ノ下ニ着込ミテ衣カツギシタリ帯ハ今頃ト違ヒ細クシテ男帯ノ幅ト同シ常ノ女ハ前髮ヲ眉ノ上ニナル程ニ切リテ前サマニ垂レタリ髮タボナドハ出サス丸ク束子テ襟ノ後ニアリ首飾ノ類スベテナシ

元龜天正の頃

慶長の頃

「元龜天正頃マテ男子大抵皆禿髻ヲ生シ荒武者ノ如キ出立ヲ喜ビ若シ髻ナケレバ不具ノ如クニ輕蔑セラレハ習ニテ髻ナシト惡口セラレテ即時サシチガヘテ死シタル男モアリキ然レモ慶長ノ頃ヨリ世ハ漸ク治平ニ傾キタレハ次第ニ髻ヲソル事行ハレ髻ハヘタル人ヲ見レバ蝦夷ガ島ノ人ニ似タリト笑フモノモアルニ至レリ但々其後モ武家ニ仕ヘテ奴ト唱ヘシモノ禿髻ヲ生シタテ上ヘカキアゲ面貌ニ剛俠ヲ示メス事流行シ其髻ハ垂レサル爲メニ蠟燭ノ流レタルニ松脂ヲ雜エテ膏ヲ作リテ髻ニ附ケタリ

天文の頃
唐輪

「コレヨリ先キ女ハ多ク垂髮ナレモ天文ノ頃ヨリナリケム亦唐輪ニ結ブ事モ行ナハレタリ唐輪ハ鎌倉足利時代童男ハ髮風（中古ノ如ク鬪食姿兒）ナレモ

寛永の頃 終、ニ女ニモ移リタリト見エタリ、慶長ノ末寛永ノ頃ニ至リ此鬘一變シテ兵庫
藩トナリ其後勝山鬘(承應明歴)島田鬘(寛文ノ)丸鬘(延寶以前ヨリ)等相繼ギテ起
ルノミニシテヨシアル女ハ猶大抵垂髮ナリ町家ノ女タリハ祝儀ナドノ時ハ
下ケ髮ニシタルコト、見エタリ然レハ貞享ノ末ヨリ士民漸ク華美ニ流レ、髮
油、鬘付(加羅油ト)長ガモシ、平髻、サシ櫛、筥、前髮タテ、紅粉、白粉、キハズミ、オヨリ
頭巾、留針、浮世ツラ、笠等行ハレ尋テ髻モ行ハル、ニ至レリ此頃ヨリハ女ノ
帶幅モ廣クナリ、テ丈モ一丈二三尺ノ者ヲ用ヒ(昔ハ大凡ソ六尺五)衣服ノ袖モ
大ニナリ男ハ羽織長ク着ル様ニナレリ是ヨリ後、ピンサシ鬘等種々ノ髮風出
テ來リテ盛ニ髮飾ヲ用ヒ遂ニ公卿、僧紳、婦人、ハ外ハ垂髮ハ不便ニシテ、飾
ナキモ、自ラ廢レルニ至レリ

貞享の頃
粧飾品

此の如く或は外國との交際より或は不便利を感ずるよ
り或は時の流行より或は時勢の境遇變化より或は止を得

髮風變遷の
原因

天地的社會
的影響

各人種ハ其
れ自身ノ美
の標準を以
て種族の異
なるに依テ
異なる變化
を來ス

ざるより種々の段を踏みつゝ變遷する者なり、今日に於て
は西洋の事物流行し従て西洋束髮の影響あり、而して其東
髮流行の都鄙の間に大に差あるを見れば人間嗜好の變化
も天地的社會的勢力に支配せらるゝを見るなり、西洋今日
の髮風も少なからざる變遷を経たるものなりと云ふ、夫れ
斯の如く變遷するは蓋し美に對する標準なく外界の境遇
と自らの經驗より來れるなり、故に人間の美を愛するは天
性なりと雖も此の天性を發達せしめたるものは境遇と經
験なるを知らざる可からず、試みよ希臘の「ジュピター」又は
「アポロ」の神或は「ヘラクリス」の彫刻を以て埃及又は亞刺比
亞の彫像を比較せば一は高尚にして麗はしく一は野鄙に
して物凄さを覺ゆん、蓋し其人々は彫刻建築等に關しては

各人の美麗と壯大の最も高尙なる理想を表出するを勤めたるものなり、余輩は之れより、一二の小説家詩人の美貌の説明如何を見ん、

唐時代の美

「芙蓉不及美人粧、水殿風來珠翠香」と云ひ、「片々行雲著蟬鬢、織々初月上鴉黃」と云ひ又た「的々朱簾白日映、峨々玉顏紅粉粧」と云ひ「明眸皓齒」と云ふは唐時代の美人とする所なるが如し又た「珠色織好風度超羣、舉止窈窕笑媚婀娜」の如き或は「手如柔荑、膚如凝脂、領如蝤蠐、齒如瓠犀、螭首蛾眉、巧笑倩兮、美目盼兮」の如きは殆んど美人の標準と云ふべきものあるが如し、我邦小説家の説明形容は支那文學の影響を蒙り風俗も唐風に倣はんとしたるはと云ふれば大同小異なるのみ、

柴式部の容貌
其一

「繪にかけたる楊貴妃のかたちには、いみじきまじりありければ、いさにほひなし、大液の芙蓉、未央のやなぎもげに、かよひたりしかたちを、からめいたるふるひ、うるはしうこそありけぬ、更衣のさま也なつかしうたげなりしを、帝の也おぼしいづるに、花鳥の色にいれぬ、いそふべきかたぞなき、」

(源氏物語 桐壺)

其二

「ふきあやのひさへがされなめり、なに、かあらむうへにきて、かしらつきほそやかに、ちひさき人のものげなきすがたぞ、またるかほなきは、さしむかひたらむひさなどにも、わざと見ゆまじうもてなしたり、手つきやせやせにていたうひきかくした、めり、軒端秋也いまひさりは、ひんがしむきにてのころさころなく見ゆ、まろきうすもの、ひさへがされ、ふたあぬのこうちぎだつものないがしるにきなして、くれなぬのふしひきゆへるきはまで、胸あらはえ、ほうぞくなるもてなしなり、いさゝるうおかしげに、つぶく、さふえて、をいるかなるひとの、かしらつきひたひつきものあざやかに、まみくちつきいさあいきやうづきはなやかなるかたちなり、かみはいとふさやかに、てながくはあ

ねど、さかりばかたのほいさきふげに、すべていさねぢけたるをこるなく
おかしげなる見えたり、むべこそおやの世になくはおもふらめさ、おかしく
見給ふ、こゝちぞなほえすかなるけをそへばやさるを見ゆる、かごなきには
あるまじ」

其三

(源氏物語 空蟬)

(二)
しほみてば
入ぬるいそ
の草なれいそ
みらくもく
なく戀らく
おほき

「源氏の君也
とさけなくうちふくたみ給へるびんぐき、あざれたるうちぎすがたにて、笛
をなつかしうふきすさびつゝのぞき給へれば、女君^{紫上}ありつる花の露にうれ
たるおかしちして、そひふし給へるさきうつくしうらうたげなり、おいか
うふぼる、いやうにておはしなから、さくも渡り給はぬなまうくめしかりけ
れば、例ならずそむき給へる成べし、はし^{源氏の也}のかたについぬて、こちやその給へ
ざおさるひす、いりぬるいそのさくちまをさびて、口おほひし給へるさま、いみ
しうされてうつくし」

其四

(源氏物語 紅葉賀)

「みづからもうち系み給へる、いさおかしきいるあひつらつきなり、ほいつき

さかいらぬるやうにふくらかにて、かみのかいれるひま、うつくじうお
ぼかまみのいとあまりわらいかなるぞ、いさしもなたかく見むさりける、
そのほかは、露なんつゝべくもあらず」

(源氏物語 野分)

其五

「姫君は、いさあざやかにけだかういまめかしきさまし給ひて、げにたゝ人に
て見奉らば、にげなうぞ見む給ふ、さくらのほそあが、山ぶきなどのをりにあ
ひたる色あひのなつかしきほどにかさなりたるすそまで、あいぎやうのこ
ぼれおつるやうに見ゆる、御もてなしたんごもらう、うつくしう、こゝるはづか
しきけさへそひたまへり、いまひき流は、うす紅梅に御ぐしいるにて、柳のい
さのやうにとをく、さ見ゆ、いさをびやかになまめかしう、すみたるさまし
て、おもしろかに心ふかきけはひはまさり賜へれどにほひやかなるけはひひ、
こよなしこそ人おもへる」

(源氏物語 竹川)

其六

「姫君はらうくしく、ふかくおもりに見む給ふ、わか君のおほきりにらう

其七

たげあるさまして、物づいみいたる氣をひいさうつくしうさまくははす
「に、ぎ、い、し、く、あ、い、ぎ、や、う、づ、き、お、か、し、げ、な、る、な、い、よ、く、ほ、こ、り、が、に、う、ち、ま、
けて、わ、ら、ひ、な、さ、そ、ぼ、る、れ、ば、に、ほ、ひ、お、ほ、く、見、え、て、さ、る、か、た、に、い、さ、お、か、し、き
人、さ、ま、な、り」

(源氏物語 橘姫)

其八

「つ、ら、つ、き、い、さ、ら、う、た、げ、に、て、ま、ゆ、の、わ、た、り、う、ち、け、ふ、り、い、は、げ、な、く、い、や、り、
た、る、ひ、た、ひ、つ、き、か、む、さ、い、い、み、し、う、つ、く、し、ね、び、ゆ、か、む、さ、ま、ゆ、か、し、き、人、か
な、さ、め、さ、ま、り、給、ふ」

(源氏物語 空蝉)

其九

「を、さ、な、こ、い、る、に、も、さ、す、が、に、う、ち、ま、も、り、て、ふ、し、め、に、な、り、て、う、つ、ぶ、し、た、る、に、
こ、ぼ、れ、か、い、り、た、る、か、み、つ、や、く、さ、め、で、た、う、見、ゆ」

(源氏物語 若菜)

(源氏物語 若菜)

右も枚擧せるものは以て當時の美貌如何を知るも足る

髪風を愛するも時代の變遷と共に

べし、愛嬌を不る、許りにして花やかなる形を愛する、今日に於ても更らに變ることなしと雖も公家世盛りの時代は長々しく髪の後へ垂れかゝるを以て最とうつくしとて稱賛したれば紫式部も「かみのかゝれるひま／＼うつくしうおぢゆ」と云はれたり、然れども今日に於ては西洋風束髪の淑女却て可愛らしく又時として嶋田鬘「イナヨガイシ」杯の令嬢は最もうつりよきさまわり、之を以て知る、美貌の對するの標準は人種の異なるに由て異なる事なるのみならず、時代の變遷と共に左右するものなるを、左も曲亭翁の美貌の説明を掲げん、

曲亭翁の美貌形容

「莞然と笑みつゝ、向上げたる顔はサナガラ海棠の雨を帯びたる風情にて句ひこぼるゝ黒髪は肩にかゝらん妖嬌に春の柳の糸たして人を招ぐにさも

似たり」

其二

「但見る長短彼身に稱ひて材昂からず低くからず顔は三月の櫻の花の吉野の山に響へる如く眉は仲秋の新月の赤石の浦に出づるに似たり小町態かふ細き腰は風に靡く楊柳も及ばず衣微像なる素肌は龍の腮の玉をや延べけん輝れるかな琥珀の櫛子花あり蝶あり白銀の紋兒解かば身長にも餘るべき翠の雲髮騰閣たる綾羅の袂ハ目ハ赫奕て陸奥山に黄金花咲き錦織の裳ハ地上に曳きて龍田川に丹楓流る秋波眇にして愛嬌溢れ蓮歩軽くして羅綺にも勝へざるべし千金投つゝ厭かずも雖も玉音未だ聞くことを得ず神か人が妖か正に是沈魚落雁羞月閉花の妙年二八の一佳人今是を見て初めて知る盛り短かき朝顔も果敢なく凋む夕顔も夜光の前なる燕石ならずば鸞鳳の傍なる鳥雀なりきと」

其三

「年齒二十と云ふて尙二つ三つには過ぐべからず面色白くして麗髯育かり眉ハ遠山の如く眼ハ朗かにして雙星に似たり隆準丹唇はこの一個の好男兒月額の迹延黒にして鬢鬣の額を蔽ふか疑はる」

其四

「紫平朝臣の童顔ハ光源氏の稚途ハ日枝の愛麗ハ梅橋ハと思ふ許りの美少年正に是丹花の唇齒の眉齒ハ瓢子の種子を並べ眼ハ二星の隈なきが如し」

(以上里見八犬傳拔萃)

「髪長くして色白く形濃かにして髪多し楊貴妃が花の眼李夫人が蓮の瞳夏野の萩の風に靡く有様翠の山に月の出る装ひなり琳袖と花のそで靡りて彩雲の翠嶺を廻るが如く絢袖と縫もの、袂閃きて碧浪の蒼浪にたいめるに似たり」

(源平盛衰記)

右に枚舉せる所を以て觀れば美貌と對する觀念の眞髓に至ると公家世盛りの時代と江戸將軍の時代とはサシタル變化なしと雖も前者は之を形容するに語句不足の憾あり、若し夫れ後者に至ては知識も大に進み文學も深達なれば美貌を形容表示するの點遙か前前者より勝るなり、今日幾多の小説家の記する處も右二大作より來れるもの多

きが如し、但髪風、衣服杯を記するも於て差あるのみ、是れ日本、人種よりの内部の自然淘汰こそ有りたれ、外國よりの移住民、少なくて、従て面色、眼色、毛色等に、サシタル變化なきに由るなり、近時よ於て最も評判よかりし「佳人の奇遇」より少しく例を取り直に美貌と戀情の關係を論究せん、

「佳人の奇遇」の容貌
其二

「遠く是ヲ望メバ、髣髴トシテ輕雲ノ新月ヲ蔽フガ如ク、近テ之ヲ見レバ、皓タル白鶴ノ仙塔ニ立ツガ如シ、年齒二十許、盛粧濃飾セズト雖モ、冷艶全ク、雪ヲ欺キ、眉ハ遠山ノ翠ヲ盡キテ、鳳鬢雲ヨリモ、緑ニ秋波情ヲ凝セドモ、炯々人ヲ射テ、暗ニ威儀ヲ備ヘ、紅頰咲テ含ミテ、皓齒微カニ顯ハレ、纖々タル細腰ニ、輕綺ノ長裾ヲ曳キ、妍々タル蓮歩ニ、綵繡ノ輕履ヲ踐ミ、餘香人ヲ襲ヒ」

「嬌喉嘹唳、黃鳥ノ啼花ニ轉ゾルガ如ク、雅韻輕清、金鳳ノ度雲ニ歌フニ似タリ、腰ハ細柳ヲ装ヒ、裾ハ流霞ヲ引ク、飄飄トシテ體飛燕ヲ擬シ、曲折シテ形回鶯ヲ學ブ」

三

「其形也、翩若驚鴻、婉若游龍、榮曜秋菊、萃茂春松、髣髴而若輕雲之蔽月、飄飄而如流風之迴雪、遠望之、皓若太陽昇朝霞、迫而察之、灼若芙蓉出綠波、穠纖得中、修短合度、眉如削成、腰約素、延頸秀頂、皓質呈露、芳澤無加、鉛華不御、雲鬢峨々、修眉聯娟、唇外朗、皓齒內鮮、明眸善睐、鬢輔承權、瓊姿隨逸、儀靜休閑、柔情綽體、媚於語言、奇服曠世、骨像應圖、披羅衣之璀璨兮、珥瑤碧之華瑤、戴金碧之首飾、綴明珠以耀軀、踐遠游之文履、曳霧縠之輕裾、微幽蘭之芳騰兮、步踟躕於山陽、（以上の拔萃貌を形容せる一例）

夫れ美を愛するは天性なり、然りと雖も、エキスタナル、アツク、アツク外表の美貌のみよ、由て戀愛し、夫妻を撰擇するは、文明人の所爲よ、非るべし、人体の美固より戀愛を惹くの一要素なりと雖も、決して開化せる人種よは、戀情の要素の冠たるものに非るなり、ダーウ井ン説を爲して曰く、開化せる人の婦人の、心情的愛、彼等の富、智力、一般の能力、特よ、彼等の社會上に占むる位地の爲

ダーウ井ンの戀愛と美貌論

めに惹かるゝなり」と思ふも常識あるものの容貌の美よりも性質の美を愛するなるべし、

然れども誰れか容貌の美と性質の美を具へたるものを愛せざるものあらんや、但二者兼備するもの少なきが爲めに此を取て彼を捨つるのみ、是れ亦自然淘汰の命と云ふべし、而して吾人は下等動物及び人間の感覺に於て彼の能く調和せる波行的聲音を聞き光澤ある色を見、人の美貌を具へたるものを愛して以て快樂なり美麗なりと稱賛し、嘈雜の聲音を嫌ひ、汚穢の事物を見ることを欲せず、醜婦も甘んぜざらんと欲するは抑も何の故に然るやに至ては、容易に知るべからずと雖も、一言以て之を云へば、吾人に快樂を與ふる故なりとせざるを得ず、左に少しく之を述べん

美人を愛するの理

凡そ人種の玄微にして道義の心冷かなるものは其骨相も亦從て醜汚なり、之に反して智識愈高く情性愈正しきときは其人種の骨相愈端麗なり、されば其種族の彼此を問はず相應に美人を愛するは決して理なきも非るなり、第一、軀の美を愛するは身體の運営大に其宜きを得以て壯健なるを知るが故なり、青白めたる病人は起居動作少しも快活たる所なく柔弱にして何となく汚らしく見ゆるなり、之れ一は愛せられ他は愛せられざる所以なり、第二、顔面の美を愛するは其人の情性も美ならんと想像するに原由す、愛嬌溢れて笑ふときは口の兩旁必ず高起し、鼻口必ず開張し、兩耳の皮上張して目眦をして上に向はしむ、而して愉逸、歡忻、飛揚、悅樂、鼓舞を惹き起すものなり、之も反して醜汚として

を以て満さるべし、若し夫れ

葛城の神の夜こそ契りしよ

美目にいよらず人は心ぞ

の後者に傾かんか快活なる國家の元氣勃興し、人皆活動進歩的となり社會の幸運を來すなり、戀愛は實に善惡邪正盛衰の岐なり、一轉すれば國家を興し一轉すれば國家を亡ぼすべし、

戀愛の正邪は國家盛衰の岐なり

結言大要

斯くの如く論じ來れば美貌の標準及び美に對するの趣味嗜好は各種族と時代の異なるに依て異なること明かなり、又美貌は最も愛すべきもの即ち天性なりと雖も之よりして不潔なる感情を惹き起すが故に寧ろ美情より重きを置きて以て人為の淘汰を施さるべからず、斯くの如くして

始めて國家の盛運を望むべし、之を爲すは完美の教育を普及せしむるにあるの理明かなりとす、

「藝くふ蟲も己が好き

昔も今も縁は異なるもの藝くふ蟲も己が好きく、よて端からの心よは聲かけられてもぞつと怖い髯面の男でも餘處の女の泣顔よりやつと見づらい笑顔の女でも我も好のは御引合いら高珠數でたさへたやうな黒菊石に詠め入て小町楊貴妃にせいもく強と餘念ないのが縁有中、よしや人なみよないとおもへば、いと根に入たふ便がかゝり、しんど可愛さのやるせなく稀に逢ふ夜の嬉れしさは生て居なが、らよみがへつた心地して三べん廻て飛たつやうなが、誠に愛づる戀の習、一向縁なき脇の心であれに迷ふは目くされなりと、おかしかるこそ愚なりけれ」

縁因は精神上の關係なり

抑も縁なるものは精神上の關係なり、戀愛を永遠に繼續するに與て力あるものは身體容貌の上にあらずして重もに精神上にあるなり、惟ふに各人が同一の容貌形狀に、造られ全婦人は恰も小町楊貴妃の如き美貌を備へたらんには孰れが是にして孰れが非あるを殆んど辨知し難うらしむるに至らん、故に天下皆美人となるの日は之れ美人なきの日なりと云はざるを得ず、何となれば同一平等ある所には美醜優劣の比較立つ能はざればなり、圓顔あり長顔あり丈高きあり又卑きあるは吾人より取りて幸ひなるものと云べし、而して夫婦の縁は此不平等なる間に發するなり、美貌より來れる縁は短くして衰へ美情より來るの縁は永くして

天下皆美人
さなるの日は
天下に美人
なきの日は
なり

兼好法師の
容貌説

衰へず、兼好法師云へることあり「人は容貌有様の、勝れたらんこそそあらまほしかるべけれ、ものうちいひたる、聞きにくからず、愛嬌ありて、詞多からぬこそ飽かず向はまほしけれ、めでたしと見る人の心劣せらるゝ、本性見えんこそ口惜しかるべけれ、人品容貌こそ生れつきたらめ、心はなごか、賢より賢にも轉さば轉らざらん、かたち心さまよき人も、才なくなりぬれば人品下り、顔にくさげなる人にも立ちまじりて、かけすけれさるゝこそ本意なきわざなれ……」と、我邦従前の習慣は女の氏なくして玉の輿に乗るなごゝ空たのめして幼より其心の松操たらん事をば好まず明けくれかたちつくらせて人の目を驚かさんとのみ謀りし故に處女もいつしか其れにならひて齋の一女が東家に食して西家に宿す

の意となれば舅姑に事へ夫に事へて家を治むる道をも知らず物に堪る事能はずして穢れたる行をなすの輩多きに至りしなり人は身体に於ても精神に於ても須らく理想の美麗を表ひさる可らずと雖も抑も誰が爲めの粧ぞや一は二人の間に快樂を興ふる爲め(人身の美に優るの美あるなし)一は社會の秩序を亂さる爲めなるのみ豈他あらんや、
 「往古殿上人に、敦兼と聞へし、容貌の醜陋なる事、たぐひすくなくぞありし、或時内裏より召事ありて同じ殿上人あまた伴ひて、参り賜ふを、北の方垣間見賜ふ、人々の麗艶なる中に、敦兼の蠻狀なる、ふた目と見るべくもあらず、あまりのうたてさに、やがてかきこもりて、敦兼の何と問へども答へず、落花意あれども、流水情なきが如し、かくて

敦兼の故事

日をふるほほに、或夜更しづまりて星月皎潔たるに、敦兼獨り詠出して、筆簾を時の音にとりすまし、

ませのうちなるしら菊もうつらふ見ること
 あわれなれ、我等が通ひて見し人も、かくしつ
 こそ枯れにし

と、くりかへし諷ひしを、北の方聞てしきりにめで、ひつ
 ましさ昔よまされり又た

醜妻女

「妻をうとみて、こと女とむらへ、ひとつ家に壁をへだて、住つ、妻のかたへいつゐによりこず、妾がもとのみ明しくらして、日を送る男ありけり、頃しも秋の夜の寐さめがちなるに、つまこひかぬる尾上の鹿、心ぼそく鳴けるに、夫の呼ければ、何事にやとたち出て、物としにいらるば、今

の鹿の聲を聞たるやといひしに、その答へいせで「我れも
しかなきてぞ人に戀られし今こそ聲をよそよのみさけ」
と詠たるに夫限なく哀れどや思ひけむ、次の日妻をおく
りかへして同穴の契をたがへざりしとかや「容貌の美醜
を問ふは眞の戀に非ず、

第七章 戀愛の進化と婚姻及び離縁

萬物進化す

凡そ天地間の事物にして悉く進化の法則に由りて運動
せざる者なし、植物上に於ても海藻は化して藓苔となり、藓
苔化して又雜草となり遂に松柏の類に變遷し又最下等の
動物より蟲となり魚となり漸次に化して人類とまで進め
り、夫れ進化の説は重力の法、星雲の説と共に科學上の大原
理とする所なり、余輩熟ら兩性戀愛の發達を見るに他物と
同じく進化の理法に從ふものなるを知るなり、

戀愛の進化

一個人より
觀察す

戀愛の進化は一個人に徴し又一種族に尋ねて之を明ら
よするを得べし、第一、一個人より見るときは幼時は母親を
慕ふのみあるも五六歳に至れば遊戯の友を慕ひ女は十四
五歳より男は十六七歳の頃に至り始めて母を慕ひ友を求

むるの外に己れの配偶を得んとするの情發するなり、此時
 又於て良教育を受け精神の確固たるものゝ家政を治むる
 爲め相共に苦樂を分たん爲め配偶と求むるも之に反して
 家庭の教育不完全にして惡毒に染みたる者の配偶を求め
 ざる中又肉交を渴望して妓樓に遊樂し親の諫めをも聞き
 入れず時として瑣瑣なき玉の如き婦女を強誘する事あり、
 前者の結果は家庭の和樂となり、夫婦の幸福となり子女
 の聰明となる、後者の結果は密賣淫となり、娼妓となり、藝妓
 となり又妾なる者を現出し私生兒をして蔓延せしむ、第二、
 一種族より見るときは亞弗利加人の如きホツテントツト
 人の如き未だ進化低度にあるものなりモンテリオの言を
 聞て之を知るべし、氏亞弗利加人又就て云へらく「黒奴は戀

種族より觀
察す

愛、情愛、嫉妬の何なるを知らず、余が久しく當地にありしも
 未だ曾て黒奴が黒女に對して些細の柔嫩又の寵愛を表し
 したるを見たることなし、余は又黒女の胸の邊りに黒奴の
 腕をおさし事あるを見ず、凡て双方にて情を通し戀愛した
 る事を表はす爲めに一の徴しもなくし、要するに彼等の
 愛情即ち戀愛を表はすの言語及び之を表出するものを有
 せずと又ジョン、テボック、ホツテントツト人又就て云へり、
 「彼等の間に愛情と云ふもの更らに無く實は冷々たるもの
 なり、コツサ、カハーの中又の婚姻するに戀愛の感情なくヤ
 リハに於ては男が妻を娶る事ハ恰も穀物を刈り取る如き
 容易輕忽の事とし戀愛の情杯は殆んど問題外の事とす」と
 之れ實に未開種族の有様なり、之を以て今日の歐米の男女

社會に比較しなば進化の程度に幾何の差異あるや知るべし、蓋し戀愛の進化を知るの標準は婚姻と離縁の發達關係を究むるに若かず、故に余は少しく之を左に述へん、

婚姻全体の論の後日に譲り爰にはスベンサー氏の分類法に從ひ唯婚姻形狀の變化を説く

第一、太古 多夫多妻 (掠奪婚姻の時代)

第二、上古 多夫一妻 (賣買婚姻の時代)

第三、中世 一夫多妻 (贈與婚姻の時代)

第四、近世 一夫一妻 (共諾婚姻の時代)

多夫多妻

第一、多夫多妻——社會の進化著しき低度なる世に婚姻の名を附すべき者なく禽獸の匹偶を得んとするど一般親子兄弟姉妹叔姪の別なく只腕力に制せられ情慾に動かさ

れ互に交媾するものにして「婚姻上の儀式」もなく現に婚姻と云ふ字に對する詞さへ無く只禽獸の如く情慾の趨る所を從て男女離合するのみなり」とハンクロードの云へるに即ち多夫多妻の雜婚時代としてラポックの所謂共有婚姻なるもの之れなり、氏曰く「グリンランドのエスキモ人中に於ては自己の妻を友人に貸與へて毫も惜むの色なきを以て最善最貴の人なり」と、又ハンクロードの言に由れば「昔時ダリヤンの地峽に住み居たる民種の賣媼を以て耻づべき事とせず貴族の婦女と雖も何に依らず人の需めに應ずるを以て上品の所作なりとし同衾を促すものあれば之を忌むを下賤の所爲なりとしたり」と、斯の如き唯一肉交あるのみにして禽獸界と更らに異ならざる時なり、

第二、多夫一妻——是は一妻毎々多夫を有するものにして、シヨルト氏の記する所に由れば、爰に四五人の兄弟ありて、其中の一人成人の後妻を娶るときは其妻は於て夫の諸兄弟も夫なりとせざる事を得、彼等の次第に成人するを俟ちて之と婚媾せり、又妻となりたる女子の方に於て一人以上の妹あるとき、婚期に達するも及んで皆婦の諸夫に於て之を取て妻となすの習慣なり、されば兄弟數人ある場合も悉く皆或の一婦女と共婚し或は數婦女と雜婚するを見る但し其共婚する婦女の多きと少きとを問はず必ず皆同居して雜婚せりと横山雅男君の「婚姻論」に此多夫妻の原因を三分して第一、蠻族中婦女の常に戰鬥及び移轉の妨となるを以て之を殺せし事、第二、婦人の常に獨立の生計を營む

こと能はざるを以て生るゝ女子の多く殺さるゝ事、第三、稍々財産を重んずるの念を生じ少數婦女と財産視するも至りし事と歸せり、トロータ人、ダイナ島、アリウシヤン嶋、カナリヤ嶋、セイロン嶋等に於ては此習慣ありしと云ふ、スペインサの說に由れば多夫一妻は其夫の各兒女を養育する爲めに力を盡す能はざる所に存す、一夫が兒女を愛顧せざるも他の夫之を愛顧すると云ふ益あるに由ると、

第三、一夫多妻——スペインサ以爲らく種族若しくは國民を總括して見るに地球上多數の人民が一夫多妻に由るといふ可なり、而して一夫一妻の甚だ稀な今日試験中にありとするも可なりと、實に一夫多妻の世界に廣く行はれ又娼妓の如きは一妻多夫の蠻習と云はざるを得ず、鳥類杯も

其配を撰びて雌雄巢中より親睦し蛇や魚は初配のもので永く交りて其配を改めず同處同穴に棲息するものあり、若し夫れ人類にして豚犬猫鶏の如く未だ一定せる配偶に執着せざるものあらば余の實に其人の最下等にして蛇魚の如きにも尙ほ耻づべきものなりと云はざるを得ず、スペインサ
 ー又以爲らく戦争に従事する種族に於ては婚姻は殆んど全く一夫多妻に限らんとす是れ亂世に於て自ら發生すべき事件にして男子は悉く軍人となり妻子はさほど緊要なるものと考へられざるに由る者なり、若し戦争のみに従事する事をせずして農業工業等に勉勵すべき國柄にありては一夫多妻は妻なきものを多く生じ且は經濟上に於て甚だ不都合に考へらるゝ様になるなり、其故は數妻を養ひ得

るもの甚だ少しく一人の妻を持つものは妻なきものより能く勞働するを常とすれば遂に一夫一妻の行はるゝに至りしなりとなり、而して一夫多妻の風は今日有力者の門家に存在し、農工者等の下民は自ら一夫一妻の風を常道とす、
 るが如し、

一夫一妻

第四、一夫一妻——ニツケル氏は世界の製造以來人類の五

分の四迄は一夫多妻なりと云ひしとかや、實は婦女子は或の掠奪せられ或は賣買せられ財産の如く奴隸の如く器物の如く單に生殖作用を遂げ肉慾を一時満足するの一器械として用ひられたる事多きが故にニツケル氏の言當らずと雖遠からざるものなるべし、凡そ婚姻の變遷するは主觀的精神の發達と社會組織の進化、國土の風俗習慣、種族一般

の氣風家族の狀態より變遷し來るものなれば、今後、於て如何なる形式が婚姻上に於て最も正當にして純潔に且つ吾人の理想的に行ふべきものなりと問ふ者あらば、余は實に一夫一妻の制なりと答へざるを得ず、何となれば社會の進化するに從ひ經濟上の關係密になるが故に工業最も隆んになりて社會永久の基礎となる可く智識益發達すると共に天地の道理を究め利潤の爲めは動作するに至り又感情の進歩すれば下等の淫慾に陥らず高尚の快樂を欲するに至るべければなり、國の本は家にあり家の本は夫婦にあり、夫婦閨門の不潔を欲して國家社會の隆盛を希望するは非なり、

夫れ婚姻するも離縁するも更らに一定の主義なく再三

再四甲乙と離合し嫁娶屢々にして己れ之を耻ぢず又社會の良心之を呵責せざる時は即ち野蠻の境界なり、統計數に由て我國結婚離婚の數を見るときは實は嘆息に堪へざるものあるなり、左に少しく離縁に就て述べん

離縁の原因

第一、媒人の粗忽

互の事情を充分に檢察せず互の失所を粧飾し唯一二度の見合を爲さしめ未だ其性質を看破せざるに早く既に婚姻するが故に一家を持って金錢上の關係等生ずるときは我儘を働らき果ては忌やみと生ずるに至る、第二、結婚を以て容易の事とし婦女を娶るは恰も器物を買ふ如く氣は叶はざれば之を棄つるの決意にて爲すが故に離縁も甚だ容易かりし即ち三行り半の去狀は妻子を放逐するの力ありしな

第二、婚姻を重んぜず

予、其、事、を、重、ん、ぜ、ず、と、書、き、し、